

文化交流使の活動報告

まずその国の文化を学んで

文化交流使の国本武春です。

私は現在、アメリカ、テネシー州のジョンソンシティという町にあるイーストテネシー州立大学(ETSU)に留学生として日々通いながら活動しております。この学校にはアメリカでも珍しい「ブルークラス&オールドタイムミュージックプログラム」(日本でいうと民謡、古典音楽学部のようなもの)と「ストーリーテリングクラス」(日本でいうと浪曲、落語、講談学部のようなもの)があります。アメリカの音楽や物語のルーツなどを学びながら、世界で一番エンターテインメントの盛んなア



ジョンソンシティの書店でのイベント



NATOのレセプション

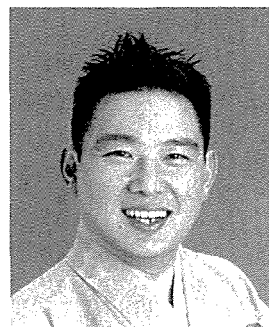
メリカの音楽や文化のふるさともいえるこの場所で、私は学校のブルークラス(カントリー音楽の一種で電気楽器やドラムを使わないピュアで商業的でない音楽)バンドの一員として数々のコンサートやイベントなどに参加しています。世界ではじめて日本の三味線が入った私たちのブルークラスバンドはどこへ行っても演奏しても大好評をいただき、先日はNATO(北大西洋条約機構)の招きでベルギーのブリュッセルでも公演してまいりました。

文化交流使の大きな目的でもある「その国の文化を学ぶ」という点で、三味線にバンジ

ョーやマンドリンの奏法を取り入れ、今までになかった三味線によるブルークラスの演奏を可能にできたことは大きな収穫だったと思います。初めから自国の文化を押し付けるのではなく、まずその国の文化を学びながらその土地の生活や人々に溶け込み、日本に十分興味をもっていた後にはじわじわと日本の文化を伝えていく。こういうふうに着実に足着いた活動ができますのも、一年間

浪曲師

くにもとたけはる
国本武春



プロフィール

本名：加藤 武
1960年生まれ

【おもな活動】

- 1985 歌舞伎座での「豪華浪曲大会」に出演
- 1987 東京などでロック三味線独演会を開く
- 1990 デビューアルバム『福助』をリリース
- 2002 ニューヨーク、ワシントンDCでミュージカル『太平洋序曲』を公演

【おもな受賞】

- 1995 芸術祭新人賞、浅草芸能大賞(新人賞)
- 1999 花形演芸大賞(大賞)
- 2000 芸術選奨文部科学大臣新人賞
- 2002 花形演芸大賞(大賞)

という長い期間文化交流使としてアメリカに滞在させていただいているおかげと心より感謝いたしております。半年が経過し現在ちょうど折り返し地点。これからは文化交流使のもう一方の目的である「日本の文化を伝える」という点に重点をおきながら、アメリカの、それも特にトラディショナルな音楽や芸能をたいへん好むここアパラチア地方の人々に、浪曲をはじめとする日本のすばらしい音楽文化を伝えてまいりたいと考えております。

文化交流使の活動報告

ロンドン右往左往

一月一六日、真冬のロンドンに到着。今回は文化交流使としておにも二つの仕事がある。

一つ目の役割が二月七日にまずやってきた。テルフォードという町の高校で行われた日本フェスティバルの一環として、落語のワークショップを開いた。私が英語と日本語で演じるミニ落語『既火事』と『桜鯛』で始まって、扇子や手ぬぐいの小道具としての使い方の体験指導。最終的には、たった一日で新作落語を作ってしまうという大胆な企画だ。これが予想外におもしろかった。参加者に演劇担当の先生が多かったので物怖じしない。『既火事』の夫婦の会話などは瞬時にアドリブを入れて



扇子をバイオリンに見立てた参加者に細かい演技指導（テルフォードでのワークショップ）



蕎麦を食べる仕草を英国男性に指導（ロンドン日本大使館にて）

演じてくれる。そして最後の発表会は奇想天外。馬鹿な家来と主人の落語を作ったメキシコ出身の男性は扇子を口ひげに見立てて喜んでいる。使い方は邪道だが、悦に入っている彼の姿がおかしくて仕方なかった。どうやら彼らは一方的に表現を見せられることよりも、一緒に考えながら咀嚼することを好むらしい。文化の交流とはこういうことをいうのだろうと寒いロンドンで思った。

四月二日にはRAD A王立演劇アカデミーの小劇場で、一人芝居『接見』英語版を上演した。ここで日本人が芝居するのは私が初めてらしい。一か月前から演技の先生の指導でイギリス流に調整していた。

だが戸惑いは多かった。先生は執拗にリアリズムを追求する。しかしこれは日本の喜劇である。私は良い意味で妥協点を探すことにした。最後まで問題になったのは「間」である。イギリスでは無音を嫌ってとにかく喋らせる。だが静かな「間」の時にこそ芝居は動いているのである。それこそ日本の心である。誤解

喜劇俳優

こみやたかやす
小宮孝泰



プロフィール

1956年生まれ

【おもな活動】

- 1980 コント赤信号としてTVデビュー
- 1994 松竹『ベニスの商人』出演
- 1994 NHK大河ドラマ『炎立つ』出演
- 1995 「星屑の会」創設
- 2001 小宮孝泰一人芝居『接見』を公演

【おもな受賞】

- 1981 日本放送演芸大賞ホープ賞

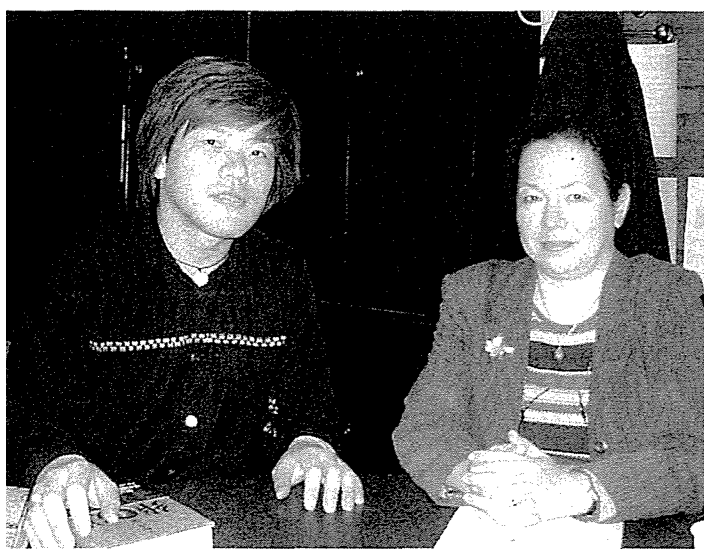
を恐れずに言えば、この点を私はシェイクスピアの功罪だと思っている。音響や照明との作業も難航したが、幸い本番当日は大勢のお客様にも助けられて満足できる結果に終わった。やはり喜劇は現場で生きているのである。他にも名門校イートンカレッジや日本大使館、教会や小学校など各所でワークショップや芝居をやった。教えに来たつもりの私が教わったことがずいぶんある。それを生かして、いつの日かフリンジの小劇場で一人芝居を上演する日を夢見ている私である。

文化交流使の活動報告

「言葉」を探りながら

文化庁から平成一五年度の「文化交流使」としてパリに派遣されて、ちょうど、二か月ほどを経たところです。私は、一年間の滞在の予定で、その間に各地での講義、講演活動を通じて、主に日本文学についての紹介を行う予定です。特に、パリ第七大学の東洋言語文学部日本語科では、ほぼ毎月一度の割合で継続的に講演を行うことになっています。

四月五日に、私は、第七大学での第一回目の講義を行ってきました。この日のクラスは、四年生の「翻訳理論及び実習」ゼミで、普段



フランスでの活動の1コマ

はフランス語での授業だそうですが、いい機会だからというので、講義はすべて日本語で行われました。テーマは、日本の小説の男性の一人称代名詞の多様さについてです。

よく知られているとおり、一般に日本語では主語や目的語が省略される傾向にあり、人称代名詞の使用頻度は、例えばフランス語などに比べて非常に少ないのですが、他方で、フランス語では一人称代名詞はどんな場合でも常に「J・E」と決まっていますが、日本語の場合、「わたし」「わたし」「わたし」「わたし」とさまざまに変化します。そして、しばしば一人の人間が、場面に応じてそれらを巧みに使い分けています。これは、「個人」という存在を考える際に、非常に重要な問題となります。日本文学には、「私小説」の伝統がありますが、その際に、多くの作家が、「私」を主語にするのではなく、作者と思しき架空の人物を創造し、三人称代名詞を用いながら「彼」について書くという手法を取ってきました。これは、ヨーロッパの言語では常に不変であり、それゆえに不変の「個人」を指し示すことができた「私」という代名詞を日本語に導入する際の一種の捻れであったように思われます。

小説家

ひらの けい ちろう
平野啓一郎

プロフィール

1975年生まれ

【おもな活動】

- 1998 長編『日蝕』刊行
- 1999 長編『一月物語』刊行
- 2001 エッセイ集『文明の憂鬱』刊行
- 2002 長編『葬送』第一部、第二部刊行
- 2003 短編集『高瀬川』刊行
- 2004 短編集『滴り落ちる時計たちの波紋』刊行予定

【おもな受賞】

- 1999 芥川賞
- 京都府文化賞（奨励賞）

講義では、学生から、そうした日本語の一人称代名詞の多様性と、それに付随する文章の変化とを、どういう形でフランス語に生かすべきかという質問が提出され、それについて一頻り議論がありました。

現代では、情報はますます活発に世界中を駆けめぐっていますが、異なる言語を使用する国の人間同士が理解し合うためには、互いの言語構造の違いを十分に理解することが肝心だということを、私はこの「文化交流使」としての活動を通じて、強く実感しています。

文化交流使の活動報告

1%の音楽家と九九%の愛好家

三年後の欧州連合（EU）加盟を目指して社会基盤整備の続くクロアチア共和国。独立は一九九一年。アドリア海をはさんでイタリアの対岸に位置し、その長い海岸線にはドゥブロヴニクをはじめユネスコ世界遺産に指定された魅力的な都市が点在し世界中から多くの観光客が訪れます。最近ではクロアチアの元警察官、格闘家で国会議員のミルコ・クロコップさんが小泉首相と面会し話題になりました。

さて私はそのクロアチア共和国を中心に、三か月間「文化交流使」として活動してまいりました。ザグレブフィルハーモニー管弦楽団との共演をはじめ、大小さまざまな街での演奏会、音楽教育現場での指導を行ったほか、多



ザグレブフィルハーモニー管弦楽団との共演



音楽学校における公開レッスン

くの教育者・行政文化関係者とお話をする機会にも恵まれました。その印象は「成熟した音楽文化をもつ国（うらやましいな）」。特に興味深かったのは音楽教育システム。多くの子どもたちは普通の小学校の他に音楽小学校へかよいます。一年生は三〇分の実技（楽器）レッスンが週二回、ソルフェージュ、理論など音楽の基礎的な授業が週二回、計四回のレッスン・授業、学年が上がると時間と科目が増えます（公立ですから親の経済的負担の心配はありません！）。私はこれまでも同様の音楽教育環境を、ロシア、東欧諸国を訪ねた際に目にしてきました。そしてそのことを専門家育成のためのすばらしい方法という面でもらえていました。しかし今回三か月間滞在し

さまざまな角度から音楽文化に接すること、こうした教育システムは実は専門家教育ではなく、1%の専門家と九九%の音楽文化を理解し愛し支える人々を育てているのだということに気がきました。

まだ国境沿いの街の家々には多くの弾痕が残り、破壊された建物の残骸がユーゴ紛争の激しさをもの語り胸が痛

みます。もちろん演奏会場も楽器もまだまだ十分に整備されていません。そんな街でもしっかりした音楽教育は行われているのです。私は今回ピアノの演奏を通じて多くの人々と心をかかわることができ——月並みな言い方ですが——音楽は万国共通語であることを実感しました。と同時に「ふと」我が国における新しい音楽教育環境創出の必要性を強く感じたのです。

プロフィール

1959年生まれ

【おもな活動】

- 1997 ケルン「現代日本音楽コンサート」ケルン日本文化会館
- 2002 ルーマニア国立オーケストラ定期演奏会出演（ブラームス／ピアノ協奏曲第2番）
- 2003 エントリンゲン（ドイツ）にてリサイタル
ロシアにてサンクトペテルブルグ建都300年記念演奏会出演
（ラフマニノフ／ピアノ協奏曲）

【おもな受賞】

マリア・カナルス国際コンクール入賞

ピアニスト

み た に お ん
三谷 温

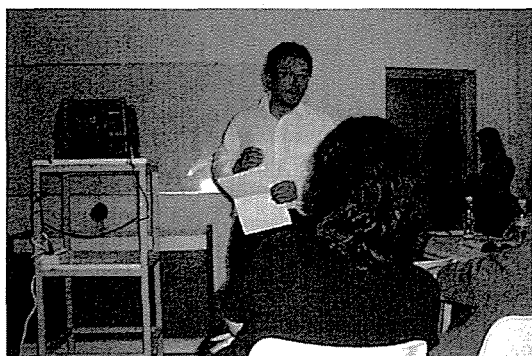


イスラエルでの日本映画連続講演

この三月からイスラエルの大学に籍を置きながら、日本映画について講演を行っています。テルアビブ大学、ハイファ大学、ヘブライ大学、それにシネマテック・テルアビブといった、映画における博物館のような場所が、だいたいこの場所です。またそれと平行して、イスラエルの映画を集中的に見ています。たぶん七月の帰国までには一〇〇本くらいは見られるでしょう。映画俳優や映画学者、それに日本文化研究家に会って、この国の文化事情をいろいろと教えてもらっています。それは帰国してから論文の形をとる予定です。



シネマテックでのインタビュー



テルアビブ大学での講演

私の講演の題目は、例えばこのようなものです。戦争前から現在まで『伊豆の踊子』がいくたびも女優をかえて映画化されているが、それを比べてみると、どのように日本映画の変化と、観客である日本人の心の歴史がたどれるか。『ゴジラ』を五〇年前に製作した日本人は、そこにどのように原子爆弾への複雑な気持ちと託したか。日本と韓国では、仏教と映画の関係がどう違うか。

観客の反応はきわめて積極的です。日本映画は黒澤明はもちろんのこと、北野武や宮崎駿までがVCDで出回っているので、強い期待をもたれています。そこでいきなり、北野武が人形浄瑠璃からどのように影響を受けたのかを教えてほしいといった質問が出てきたりします。もともとユダヤ人の根底にあるのはユダヤ教で、ここでは偶像崇拜が禁じられています。神はけっして姿を描いてはならず、もっぱら声によって表象されてきました。映画は映像

と音の組み合わせなのですが、この声の扱い方をめぐって思いがけない意見を教えてもらったりしました。

イスラエルは建国以来常に戦争をしてきた社会ですが、その背後に興味深い文化があることがわかったのも、今回の収穫でした。秋にはセルビア・モンテネグロに同じプロジェクトをもつて行く予定です。

プロフィール

1953年生まれ
本名：四方田剛己

【おもな活動】

映画批評、比較文化論を展開
泉鏡花映画祭（金沢）ディレクター
1996年より毎年、日本映画史シンポジウムを開催

【おもな著書】

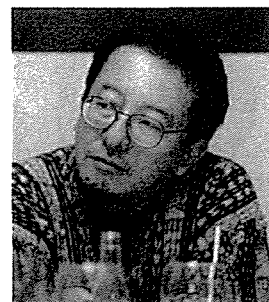
『映像の招喚』『映画史への招待』『映画と表象不可能性』等

【おもな受賞】

1998 サントリー学芸賞（社会・風俗部門）
2000 伊藤整文学賞（評論部門）、講談社エッセイ賞
2002 日本エッセイストクラブ賞

明治学院大学 教授(映画史)

よ も た い ぬ ひ こ
四方田犬彦



文化交流使の活動報告

ドイツ・Japan(漆工部)の交流

平成一六年度の文化交流使として、六月二日から約四〇日間ドイツのケルン東アジア美術館等で活動した。

一六世紀以来、日本の漆工芸品はヨーロッパに渡って各地に数多く所蔵され、それらはヨーロッパの人々に愛され現代まで伝えられてきている。今回の私のおもな活動は、私の専門とする螺鈿と蒔絵技法を中心とした加飾の作業などを現地で行いながら漆工芸についてさらに理解を深めてもらうことであった。またそれと並行してケルン東アジア美術館とミユンスターにある塗料美術館の収蔵品のうち応急的な部分修理等が必要なもの計八点について私の監督の下で助手が中心になって修理を行った。



ワークショップで展示された作品を前に



ワークショップでの貝切りの実演

また活動期間終盤の六月二七日にはケルン東アジア美術館にてワークショップを開催した。当日は日曜日にもかかわらず約四〇名の熱心な参加者が集まり、午前中は日本の螺鈿技法の歴史についての講演、今回制作した作品の展示、また文化庁制作の工芸技術記録映画『螺鈿 北村昭斎のわざ』の上映、午後からは今回記録した作業写真も用いて、実際に材料、道具などにできるかぎり触れてもらいながら伝統的な漆工技法について説明し、またそれらが漆工芸品の修復にも活かされていることなどの話をした。

道具についての話は特に参加者の興味を引いたようである。繊細な蒔絵を描くには鼠の毛で作った細い筆を用いるが、現代では入手がきわめて困難なこと、また漆を塗る刷毛には真っ直ぐで張りのある女性の髪が欠かせない上にこれらの道具を作る技術者も少ないことなどであった。その話の中で西洋の女性の美しい金髪なら良い刷毛ができるかも知れないと話したところ、同館の若い女性学芸員から「私の髪を刷毛に仕立ててみてください」と自分の髪を一束切って届けてくださった。帰国後さっそく漆刷毛製作者にお願いして刷毛

に仕立てていただいている。金髪の漆刷毛で塗った漆器をお礼に報告ができるのを楽しみにしているところである。

ドイツでは従来から日本と共同で文化財調査研究が行われてきた。近年ではドイツ国内の修復技術者が日本の漆工芸に関する専門書を出版するなど、漆工芸も国際的な段階に入ってきていることを実感する。今回の私の活動が今後の世界における漆工芸の発展に少しでも役立てば幸いである。

プロフィール

1938年生まれ
本名：北村謙一

【おもな活動】

- 1994 選定保存技術「漆工品修理」保持者
- 1999 重要無形文化財「螺鈿」(各個認定)保持者
- 2003 工芸技術記録映画「螺鈿—北村昭斎のわざ—」の製作

【おもな受賞歴】

- 1997 第44回日本伝統工芸展文部大臣賞、紫綬褒章
- 1998 第45回日本伝統工芸展朝日新聞社賞

重要無形文化財「螺鈿」
(各個認定)保持者

きたむらしょうさい
北村昭斎 (雅号)



文化交流使の活動報告

セントルイスの学校訪問



3年生のクラスで折り紙を教える（セントルイス郊外のボイト小学校で）

五月二四日、ミズーリ州セントルイスのデューイ・インターナショナル・スタディズ学校を訪ねた。そこには四年前、私の勤務先ワシントン州スポケーンの武庫川女子大学アメリカ分校付設日本文化センターを通じて、日本の市民からの新・友情人形を贈呈してあった。正式の贈呈式をし、併せて日本文化の紹介もしたいと選んだ学校である。

この学校は多様な文化の交流を目指す国際教育実践校

として知られている。子どもたちの八割を黒人が占め、移民の子どもたちも多い。広い廊下の両側に各国別の展示があり、ポスターや生活用品が飾られてい

る。また、ドイツ語・フランス語・スペイン語・ロシア語の少人数のクラスで、低学年の児童が生き生きと母国語を学んでいたのが印象に残る。

ジムで二〇〇人の子どもと先生の会に出席した。日本の市民寄贈の三体の日本人形を紹介し、一九二七年の「青い目の人形」と「答礼人形」の歴史を話し、その精神を受け継ぐ新・友情人形について話をした。「平和を望む者は子どもにそれを書きこまねばならない」という、人形による日米親善の提唱者シドニー・L・ギューリック博士の理想を私なりに子どもたちに伝えた。日本文化センターはこれまでの一二年間に、全米五〇州とワシントンDCの五一九の教育機関、ミズーリ州では三〇の学校に新・友情人形を贈っている。

日本製の世界地図を見せ、歴史的・地理的に日米間で相手国との見方に違いがある、ということに気づかせる。まず互いの違いを知ることが相手と自国の文化を知る第一歩だ、と気づかせたかった。挨拶やマナーの違いを説明するために持って行った「招き猫」の掌の向きの違いも子どもに心に残ると思っている。

翌二五日、郊外の小さな小学校（児童数一

答礼人形研究家

たかおか みちこ
高岡美知子



プロフィール

1932年生まれ

【おもな活動】

- 1927 日米間で行われた人形による日米親善に興味をもち、その人形大使58体の現状の調査・研究を実施
- 1990 米国ワシントン州スポケーンの武庫川女子大学アメリカ分校併設の日本文化センター館長に就任

【おもな著書】

- 2004 『人形大使—もうひとつの日米現代史—』（日経BP社）

【おもな受賞】

- 2000 外務大臣表彰

五〇人）ボイトを訪ねた。これまで日本文化の紹介を直接受けたことがないようで、二年生・三年生のクラスで地図・地球儀・食習慣・子ども遊び・学校生活などに関する質問が次々に出て、楽しかった。続く折り紙もヒットであった。小さな正方形の色紙が、自分たちの手で一瞬の内にピアノとTシャツに変身するのを身をもって体験し、目を輝かせて喜んでくれた。家に帰ったらお母さんに「今日はポケットにピアノを持って帰ったよ」と話してね、と言葉を添えた。

文化交流使の活動報告

心臓に毛が生えているわけでは……

フィリピンに活動のベースを移して、今年一〇月で一〇年目。舞台照明の仕事始めて、今年で三〇年。私自身もこの一二月で五〇歳となるようです。

女一人で一〇年間、フィリピンのマニラを拠点にしていると、なんだか心臓に毛が生えている女と思われるようですが、文化や演劇活動の大変盛んな国なのです。国立劇場（フィリピン文化センター）には付属のオーケストラ、バレエ団、劇団があり、劇団はマニラだけでなく地方にもたくさんあります。

また教育に演劇を取り入れているために、市・町・村のレベルでもコミュニティシアターをもち、日常生活の中に演劇の要素が組み込

まれています。

そしてフィリピンという国は、毎日何が起るかわからない刺激に満ちており、社会の状況が反映される演劇・舞台作品は、イコールおもしろいということになります。

もう一つは、フィリピンの人は明るく、心を大きく開けることのできるすてきな国民性をもっています。これは共同制作・共同作業をするうえで大変に有利です。

そのようなフィリピンの舞台技術関係の仲間たちと六年前にシナグ・アーツファンデーションを設立。二年前に舞台技術者のトレーニングセンターを開設し、毎月のように技術ワークショップを開催。そしてワークショップ

の参加者とともに実際の舞台作品にかかわり、連日幕を開けています。

舞台は総合芸術とよく言われますが、舞台裏の仕事もまさに総合技術なのです。舞台装置・大道具・小道具・照明・電気・メンテナンス・特殊効果・音響・録音・プロジェクター・衣裳・染色・髪・メイクアップ・舞台進行や制



音響ワークショップ参加者とともに



フィリピン国立劇場『トロイの女』舞台公演

舞台照明家

まつもと なお
松本直み



プロフィール

1954年生まれ

【おもな活動】

シアターコクーン、シアターX、BUNKAMURA オーチャードホールなどで、舞台照明を担当。

東京グローブ座のイギリス公演をはじめ、ヨーロッパ・アジアなどでの多数の海外公演の舞台照明を手掛ける。

1988年文化庁芸術家在外研修員として渡欧。ロイヤル・シェークスピア・カンパニー、ウィーン国立歌劇場にて研修をする。

1998年から1年、国際交流基金文化協力派遣事業により、フィリピン文化センターにおいて舞台照明の指導。

【おもな受賞】

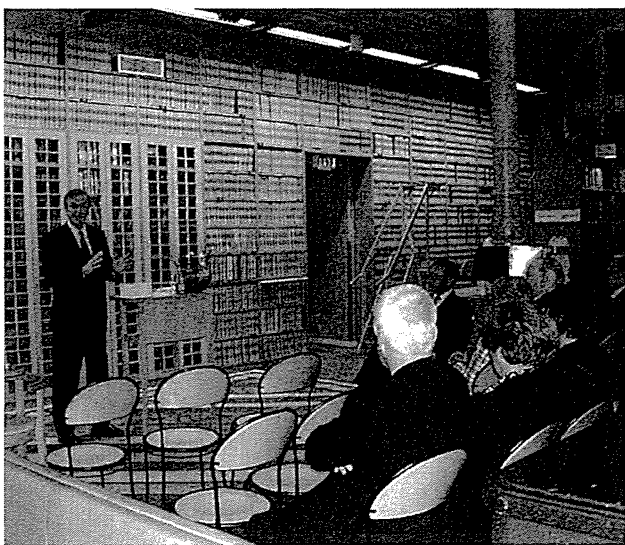
1986年ベオグラード国際演劇祭特別賞

作・印刷・宣伝等々。実際に舞台上の出演者の少なくとも二倍の人数の人たちが多様な技術をもつて一本の作品を裏で支えているのです。この手作りの小さなスタジオではすべての技術を実際に体験しながら学ぶ方法で網羅してゆきたいと思っています。

いつの日かフィリピンの舞台技術が向上しアジア最高の演劇国となることを希望しています。

静けさの文化の必要性

スウェーデンでは日本文化がわりと知られている。しかし、日本の現代文化というと、新聞、ラジオ、テレビの中に出てくるのは生け花や茶道のような非常に伝統的な文化そのものの表現や、若者の茶髪や変なピアシングのようないふふ現代都市社会のいろいろな奇怪な現象のみである。その間にある、すなわち歴史の強さに基づいた創造的な現代文化はほとんど知られていない。今年の三月に始めた文化交流使の活動はその少し忘れられている点を伝える



講演風景

つもりで始めた。

スウェーデンと日本の一つの類似点は、両国民は詩を愛読しているところである。そこでまず「日本の詩」というワークショップを、月一回ぐらいストックホルムで行っている。スウェーデン人には現代詩と俳句の違いが明らかではないため、ルールを詳しく説明する上で皆が楽しい雰囲気の中で日本の詩を楽しめることが大切だと考えている。そして徐々に五・七・五や季語、俳句の決まりを紹介し、伝統的な俳諧と連歌まで紹介する。それから現代詩と比べることに移る。ワークショップには毎回約一五人程度集まっている。

ストックホルム以外に、小さな町でもワークショップを開くことがある。おもしろいことは三万人の小さな町の人はストックホルムの人と比べると古い見方に止まっていけないことだ。現代文化・文学・思想はこうだと説明すると、オープンマインドで議論する。ストックホルムの人は、頭がいいものの偏見も多いと感じる。

日本の現代文化の代表として、もし、日本の伝統的な文化もモダンすぎた文化でもなければ何が日本の現代文化を代表するのだろうか

詩人

(元駐日スウェーデン公使)

ラーシュ・ヴァリエ

プロフィール

1947年生まれ

【おもな活動】

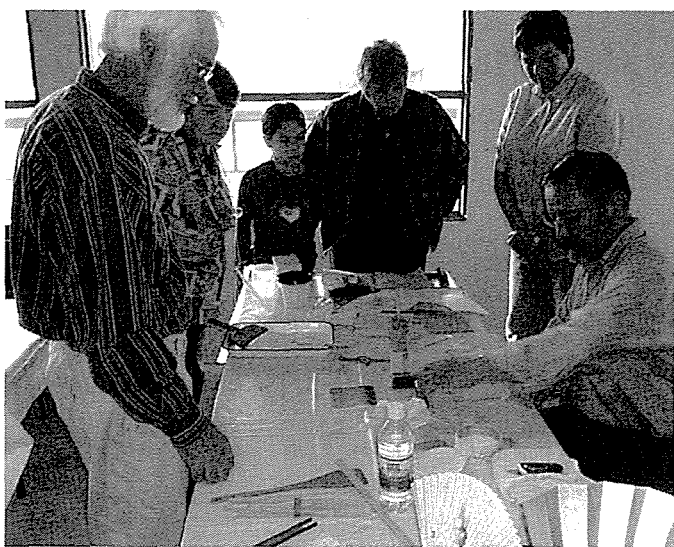
1972年から1973年および1974年から1976年、京都大学に留学。
1993年から1998年、駐日スウェーデン大使館公使。駐リトアニア大使、スウェーデン外務省東アジア部長、スウェーデン国会国際局長を歴任。

日本の俳句・詩の研究家として著名であり、「正岡子規国際俳句EILS特別賞」、中新田未来賞「スウェーデン賞」を創設。



か。私にとってそれは例えば平野啓一郎という若い作家の歴史と知識から出てくる小説、あるいは宗左近といった、宇宙と縄文時代の社会を融合する年配の詩人、または伝統のある三味線でロックンロールを演奏する吉田兄弟。日本の現代文化の本当の力は歴史と日本文化をよく知り、モダンな考え方をもっている芸術家、作家、ダンサーその他の方にあると思う。また、静けさを表す文化表現も代表的である。それは世界中の寿司バーにも、ファッションにも、携帯電話のデザインにも表れている。静けさの文化は今日の世界には必要であると考えている。

文化交流使の活動報告



扇面制作のワークショップ

カナダは すばらしいのは自然だけじゃない

夏が残る九月のはじめ、引き締まる想いやや強すぎる気負いでタラップを降りたのは太平洋に面したカナダのブリティッシュ・コロンビア州の州都であるヴィクトリアであった。それから冬が始まる一・一月末で活動を終えたのだが、思っていたように日本文化を日本画で伝えることができたのだろうか。

だが確かにいえることは、B・C州各地で行ったワークショップ（扇面用紙に各自が絵を描きそれを後日、日本で仕立て配布するというもの）に参加された皆さんはとても楽しく、しかも子どものように目を輝かせて絵を描き、食い入るように私の筆遣いを見つめて機関銃のように質問攻めにした。ヴィクトリア美術館の個展会場では床に座り込みいつまでも作品を見てくれた人たち、そして何度もかよってくれた人たちを含め四〇〇〇人が来られ、最終日には目に涙を溜めた人々に囲まれた。公開制作でも、とにかく好奇心が旺盛で「アメージング！」といったは和紙を撫でるように触り、どうしたら手に入るのか、カナダの木でもつくることは可能か、その絵の具や糊はどのようを使うのか、また何からできているか、このような絵はじめて見たと言ってしまうにはやはり座り込み、美術館員が笑いながら椅子を並べ始め、さらに連日友人を連れて来ては、私の説明を自分のことのように皆さんの前で解説してくれる方など思い出すときりがないほど熱い人たちだった。

しかしそこにはいつもしっかりと私をサポートしてくれていた彼等の美術館があった。それはとても活性化されていて人々の間に浸透していた。特に冬の季節に毎週行われる、バリエーションに富んだ企画、たくさんのボランティアの方々が支えているのだが「とにかく美術館に行けば何かがある」と思わせる。これは長く暗い冬を乗り切るカナダならではの「美術館を楽しむ」という知恵の一つなのかもしれない。こんな美術館なら私の町にも欲しいと思い、システムとは人がつくり上げるものであることを改めてカナダから教わった。

プロフィール

1951年生まれ

【おもな活動】

1996年ベトナム山岳少数民族集落にて和紙の紹介等。

2000年イタリア古典絵画描法をアレンジした作品を制作。

2002年中国、カンボジアの古民家、遺跡等をテーマにした作品を制作。

【おもな作品】

1993年秋篠宮家扇面制作

1998年出雲大社大阪分祠屏風絵制作（大阪・堺市）

1999年京濱伏見稲荷神社参集殿壁画制作（川崎市）

日本画家

すぎもと ひろし
杉本 洋

文化交流使の活動報告

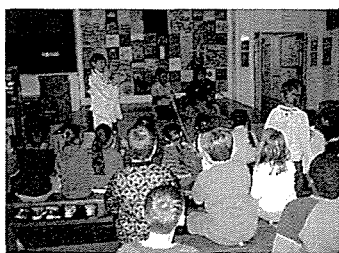
文化交流使鶴笑の

ロンドン便り戸惑いの10か月

文化庁文化交流使としてロンドンに着任してはや一〇か月。イギリスは戸惑いの連続です。

前年一二月から四五日間、私は国際交流基金バンコクセンター所長・本間豊氏の受入れで文化交流使としてタイで三〇公演を行い、「日本文化の紹介に務めた活動は、その仕事量から評価できる」(同氏の文化庁宛報告)と認められ、充実感で三か月後ロンドンに着任した。

だがイギリスは大違いであった。なんせ、ここには受入れ団体も相談に乗ってくれる人もなく、不慣れな英語で家族三人の住居探しと子どもの入学手続きから、文化交流使としての活動の場も自分で探すのだ。どこに行っても誰に会えば、活動の場が得られるのかまった



アフタースクールでのワークショップ



演芸後の楽しいふれあい

くの手探りであった。それでも「教育関係に仕切っているのは、カムデン地区のエデュケーションセンター」と人づてに知り、同センターに飛び込んだ。

最初は門前払いで資料を置くのがやっと。二回目も「忙しい」とあってもみえず、三回目に「五分だけなら」の約束で、まず「イギリスへ何を勉強に来たのか?」と質された。「日本のコメディイを教えたのだ」と応えると、「ジョークだ」と大笑いされ、やむをえず自分のビデオを置いて寒々とした心地で同センターを後にした。

それから一週間後、「まだ仕事を探しているの?」の電話が入り、オーディションとなった。休憩室のテーブルを高座にみたとスタッフ一四、五人を前に英語落語を始めたが反応がない。しかし良く見ると口を押えたり、横を向いて笑いかみ殺している。後半は堰を切つて大爆笑になり「大成功よ、これから色々お願いするわね」。

こうした体当たりの訪問で、定期的に公演できる学校など、文化交流使としての活動の場が次第に広がっている。イギリスの子どもた

落語家

しょうふく ていかくしょう
笑福亭鶴笑

プロフィール

1960年生まれ

【おもな活動】

- 1984年落語家六代目笑福亭松鶴に入門。
- 1988年ハンガリーで行われた国際人形劇フェスティバルにて、ハンガリー語のパペット落語を公演。
- 1999年モントリオール国際コメディーフェスティバルにてパペット落語公演。
- 2000年トルコ大地震慰問公演。
- 2002年国際舞台芸術見本市(モントリオール)に招待。環境落語(英語)公演。
- 【おもな受賞】
- 1993年ABCお笑い新人グランプリ優秀新人賞。
- 2003年芸術選奨文部科学大臣新人賞。

ちも、うどんを食べるしぐさなど落語を楽しく学んでくれ、環境問題を訴えたパペット落語「不思議の星のアリス」には、爆笑と惜しみない拍手をくれる。

笑いは万国共通だ。笑いは、人々の交流と平和への大きな力だと実感している。日本に對して「笑い文化のない」「笑いを忘れた国」との印象を抱くイギリスの子どもたちが、いつの日か「楽しい文化のある国でしょ」と言ってくれるよう、毎回の触れあいを大切に文化交流使としての任に励んでいる。

文化交流使の活動報告

インドにおける「私的」文化交流



「JAPAN CULTURAL MONTH」の一環で開催された個展のオープニング

一九八七年にインド人の夫と結婚して以来、私はニューデリーに住んでいます。ここでの生活は、日本で生まれ育った中で培われた価値観から、私の直面しているレベルでのインドの現実を、日本の現実と対峙させ、比較し、各々を検証しながら、その背後に大きく広がるこの国の歴史背景と文化を、理解し、消化してゆく過程でした（私の直面しているレベルで

のインドの現実」と限定しているのは、私の体験しているインドの現実が、大半のインドの現実であると概括することは、できないからです。こういうと聞かえが良いのですが、私にとっては生き残りをかけた賭けでした。

私は外国で生きてゆくことを、単に住まいが変わるだけと受け取らずに、自分（それは自分の国の文化とあいまいに同義化されました）を見直し、試す機会ととらえました。芸術を志すものとして、その場所の人々の生活、そのすべてを無視、または排除しながら生きることは、自分の人生の一部に背を向けることになり、作品に力がこもるはずがないと思ったのです。

私がインドの文化を少しずつ理解していった一七年の経緯から言えることがあります。人間が何か概念的な事柄を理解しようとするには、体験するに尽きることです。それも、生活の局面を通じての細かな感情の交流を伴ったものである必要があります。インドは、教育を受けていない人々が人口の大半を占めていて、他の国のようにほとんどの受け手が用意のできている状態ではありません。この

画家

ローチャン由理子



プロフィール

【おもな活動】

京都市立芸術大学美術学部油画大学院（修士課程）を修了。

岩絵具・水彩・ガッシュと式絵を用いての絵画制作。

インド各地（ニューデリー、ムンバイ、コルカタ、バンガロール）および日本（東京、京都、大阪）にて個展を開催。インド人作家と数多くのグループ展に出展。

意味で、インドにおいて、技術、経済面での援助または進出を通じての交流とともに、日本を全体的に理解するための、新しいメディアを模索する必要があるといえます。

絵画という視覚的メディアを通じ、私という日本人のフィルターをとおして、絵画平面上に呈示されるインドの現実の観念化されてはいますが、観光まがいの情報工作に躍らされたイメージではない、決して夢うつつにインドを「見てきた」人間には描けないものが描かれています。絵の具と紙、という材料の扱いに、イメージの組み立てにはつきりと日本の感性はにじみ出るものです。現在の私にできることは、作品を発表することだけなのです。

文化交流使の活動報告

音楽共歓の場をたずねて

「雅楽」と「ギリシア」はつながりがないようにみえますが、古代ギリシアと、古代の中国や日本の音楽のあり方には大いに通じるところがあります。音楽が人間の心情を表現するだけでなく、音楽は人間と、人間を超える存在を結びつけるものであり、森羅万象を表すものであり、宇宙の響きでもありました。近代・現代では忘れがちなこのような音楽観を回復したいと私は思います。



コンサート前の打ち合わせ風景

今回の活動の目的は、時代や民族によって表れ方の違う音楽の表面の差異を超えて、深いところで共鳴しあうことでした。レクチャー・ワークショップでは、笙の楽器の構造や機能、日本と中国古代音楽文化の流れ、雅楽の名曲の紹介などを実演を織りまぜて行い、また雅楽曲「越天楽」の習得の初歩を実際に体験してもらいました。コンサートでは、独奏・二重奏・五重奏・六重奏などの編成で、日本・ドイツ・ギリシア・フランス・ルクセンブルク・フィンランド・韓国などの音楽家と共演しました。

クレタ島でのコンサートでは、ギリシアの人々が日本の雅楽と、現代音楽をどのように受けとめるだろうと緊張しましたが、古い劇場いっばいに大勢の人が集まり、最初から最後までやわらかな熱意をもって聴いてくださったのには驚きました。聞き慣れない音に飽きてしまわないかという心配は無用でした。このあと、アテネ・テサロニキと続けましたが、どの会場でも演奏が終わるとたくさんさんの質問が出たり、感想を言ってくれたりするのです。

どの土地でも予想外の大勢の方が聞きに来てくださいました。日本文化全体に興味が高

雅楽・笙演奏家

宮田まゆみ



プロフィール

【おもな活動】

1983年東京楽所のメンバーとして欧州雅楽公演、1998年長野冬季オリンピック開会式にて「君が代」を演奏、2001年NHK交響楽団のソリストとして武満徹の作品を演奏

【おもな作品】

雅楽古典曲『調子』の独奏、ジョン・ケージ作曲『笙のための「One9」』、一柳慧作曲『独奏笙のための「星の輪」』

【おもな受賞】

1987年芸術選奨文部大臣新人賞
1993年中島健蔵賞
2004年日本文化芸術振興賞(伝統文化)

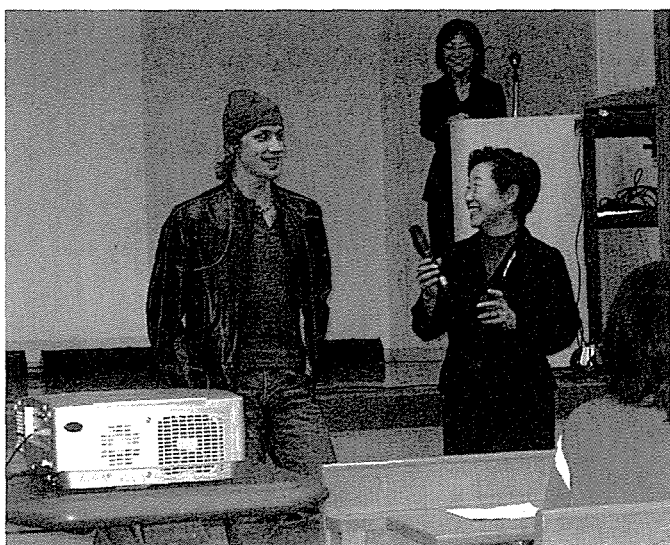
まっているのかもしれませんが、能や歌舞伎、また尺八、箏などのように一般的ではない「雅楽の笙」に大きな関心が寄せられ、また古典も現代音楽も自然に楽しんでいただけたことは、とてもうれしいものでした。各地でこれから新しい作品を書きたいという作曲家に出会いました。また、先入観で「大人が聴いても難しい音楽」と思われやすいものを、大勢の子どもたちが床に座り込んで聞き入ってくれたり、口々に感想を伝えに来てくれたりしたこともとてもうれしかったことです。

文化交流使の活動報告

バレエをおとした文化交流

私は、バレエダンサーとして世界各国で踊ることを通じて、文化交流に役立っていると感じてはいましたが、今回具体的に文化交流使に任命され、「文化交流使」という認定書をいただき、とてもうれしく思いました。

活動の会場となった品川女子学院で、一〇名以上の学生を目の前にして、彼女らの目の輝きを見たとき、少ない時間でも伝えられ



品川女子学院でのレクチャー

ることは目一杯伝えようという気持ちになりました。制服姿のかしこまった聴衆という雰囲気ではなかったたので、私も壇上に立つというのではなく、ステージに腰掛けて話しはじめました。後半、ポーズを示したり、二人の女子生徒に壇上に上がってもらったりして、とてもリラックスしたレクチャーとなり、バレエの楽しさを少しでもわかっていただけたかと思っています。

今回の活動をおして、踊りだけではなく、話して伝えることも自分は向いているという認識をもつことができたので、今後、例えば公演の前に解説をするということを、特にあまりバレエという芸術が盛んでないところで行いたいと思います。もちろん日本でもそういうことをすれば、バレエの愛好者ももっと増えるのではないかと期待しています。

私の母国ウクライナでは文化に力を入れる余裕がなく、年に数回訪れる日本をとてもうらやましく感じます。私の目から見れば、日本は西洋文化と同時に日本古来の文化をとて大事にしている魅力的な国だと思います。

バレエは、パントマイムの世界で、言葉を

発しません。しかし、良い音楽と踊りで、人間の心を豊かにしてくれるのだと信じています。初めてバレエを観る人たちが、仕草の意味を理解してから鑑賞すれば、もっともっと楽しく観ていただけるでしょう。バレエの魅力を多くの人に伝えていくことができるような活動を、これからも行っていききたいと思います。

プロフィール

【おもな活動】

1997年ウクライナ国立キエフバレエ団入団
2001年キーロフバレエに移籍
現在、ウクライナ国立キエフバレエ団プリンシパル

【おもな作品】

2004年新国立劇場バレエ『眠れる森の美女』
『ロメオとジュリエット』
2005年牧阿佐美バレエ団『三銃士』

【おもな受賞歴】

1998年ルドルフ・ヌレエフ国際バレエコンクールグランプリ
1999年名古屋国際バレエコンクール第1位およびニジンスキー賞

クラシックバレエダンサー

デニス・マトヴィエンコ

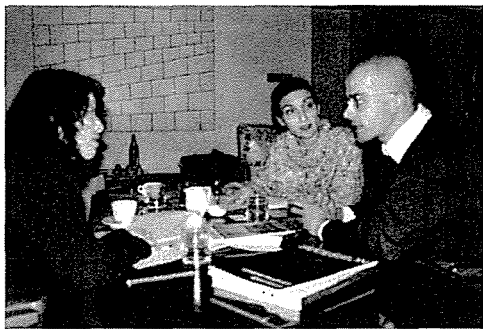


文化交流使の活動報告

オーストリアでの活動の開花に向けて

ウィーンから北西方向、電車とバスを乗り継いで片道一時間弱、ヘッツリングのなだらかな丘にオットー・ワグナー精神病院が建っている。私の作品テーマとする病院内の窓の内側と外側の写真撮影許可後、約一か月間か

ようこととなった。病院にかよいながら、他方、中学校の生徒たちの写真撮影も開始した。中学校の選定はここで出会った多くの友人たちに頼み、個人的に紹介してもらった学校である。生徒たちのポートレイトを撮りながら、将来の夢や現在の悩みを聞き、それを発端に生徒同士、お互いのポートレイトを撮り合い、作品化していくというプロジェクトである。終



美術館キュレーターと現代美術について会談



病院での取材(写真撮影)

了後、日本の国の紹介と私が撮りためた現在の日本人の日常風景写真を提示しながら、彼らの質問に答えるという形式をとった。

こちらには、クルトア・コンタクトという政府の窓口がある。外国の文化関係者のプロジェクトに関して、実現できるように援助する機関である。私のワークショップの選定先を探してくれるのもここである。プロジェクトに対して、深い理解を示してくれている。また、他方、自分自身でも友人を巻き込んでワークショップ先を開拓している。

三月末に冬時間から夏時間に替わり、ウィーンにも春がやってきた。桜の花が咲き、スタジオの窓から眺めていたカスターニャの太木にも葉が繁り、ローソク状の花を開花させようとしている。人々の顔つきも和やかになってきた。

ワークショップ・レクチャー・作品展は、美術館というスペースではなく、一般の人々と出会える場所、病院や学校等、本当にアートを必要としている場を探して歩いた。日々、作品制作をしながら、どのようにアートをすれば日本という国を認識してもらえるのか、人々をアートという熱い渦の中に巻き込めるのかを

造形作家 井上廣子



プロフィール

【おもな活動】

1999年デュッセルドルフ市文化局のゲスト・アーティストとして、ドイツで制作活動。

【おもな作品】

1997年『不在の表象』

2000年『震災と美術—1.17からうまれたもの』

2003年『汝 何を欲するか』

【おもな受賞】

1998年「大阪トリエンナーレ彫刻98デュッセルドルフ市特別賞」

2002年「Live-Art Scholarship 2001最優秀賞」

考えている。そして、自分の制作作品をとおしてのみ、人々と深く心中で語り合えると思っている。

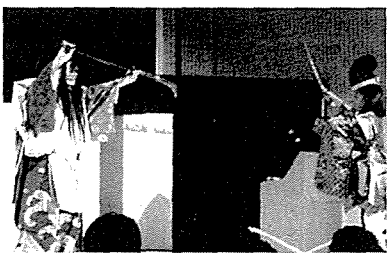
私は一九九九年以来、ドイツにスタジオをもっている。当初、ドイツ語を母国語とするオーストリア人なので、ドイツ人と似た感覚なのだろうと考えた。しかし、人々は容易に心の扉を開かない。その考えが錯覚であったと気づき、あがき苦しんだ三か月間でもあったが、やっと優しい風が吹き、今、多くの依頼が舞い込み始めた。少しずつ蒔いた人々とのコミュニケーションの種が、芽を出そうとしている。

文化交流使の活動報告

アメリカでの能の紹介

本年四月一四日より五月二七日まで、文化交流使としてアメリカに滞在し、ブラウン大学を拠点に、ハーバード、ダートマス、アーモスト、トロント、デアヴィールドの各校で講演、授業、実技指導を行い、ボストン、メトロポリタン、フィラデルフィア、リジデイーの美術館で能面、能装束の調査を行いました。この間、現地の研究者、学生等、多くの方々と文化について語り合い、多くのものをお伝えし、また多くのことを学びました。

多人数を要する能の實際をできる限りお伝えするため、妻、一〇歳と一歳半の二人の娘、妻の父の五名で出かけ、家族総動員体制となりました。装束が多く、大型スーツケース一〇個、機内持込み最大限の鞆五個、身のまわ



トロント大学で『船弁慶』を演能



トロント大学で『葵上』の装束着付を実演

り品多数という大荷物で、現地では大きなリムジンを用意していただきました。立派なリムジンも、車内にあふれる荷物で、優雅とはほど遠い旅の一座の大移動の風情でした。

日本では玄人が二〇人以上集まって行う能の準備を家族だけで行うので、時間は矢のようには飛んでゆきます。しかも舞台設営、会場担当者との打合せ、新聞の取材など、次々用がでます。大道具は義経役の娘が学生さんに説明しながら手伝ってもらい制作。私と妻で娘に装束を着付け、今度は娘と妻で私に装束を着け二人で能『船弁慶』の実演。私の着替えの間は妻が解説。映像、実演とともに能の表現を解説し、義父をモデルに舞台上で『葵上』の装束の着付。『葵上』の実演。伝統と現代について等約二時間の講演を行いました。

聴衆は食入るように話を聞いて下さり、打てば響くような反応が返ってきます。その反応が心地よく、話にも熱が入ります。質疑応答もとぎれなく、ハーバードでは約一時間、その他は会場の都合で司会が終わりになるほど、興味はつきないようでした。これから世界の表舞台で活躍する知的好奇心の高い方々が相手なので、日本理解の一助となるよう精一杯努

能楽師

河村晴久



プロフィール

【おもな活動】

1966年能「合浦」で初シテ（主演）。京都市立芸術大学大学院、京都光華女子大学、池坊短期大学、神戸大学、近畿大学等で講師を歴任。

これまで、米国ではワシントンD.C.の在米日本大使館やナショナルチェリーブロッサムフェスティバルをはじめ各地で、またアテネ（ギリシャ）、アムステルダム（オランダ）、西安（中国）など各国で演能。ハーバード大学、ダートマス大学等で講演するなど海外で多彩な活動を進める。日本能楽会会員。重要無形文化財能楽保持者（総合）認定。

めました。講演後のレセプションにも多くの方が出席され、日本に対する興味の契機になったようです。ぜひ能を見たいという声も多く、トロントでは来年の日本美術館開館時に、本格的な能の上演になりそうです。あらためて大学、美術館からのお招きもいただき、来年以降もさらに交流が続くことでしょう。

教授方とも家族ぐるみのお付き合いができ、文化交流の貴重な経験となりました。受入れ先との交渉や会場準備など多忙を極めました、が、将来の交流深化に向け楽しい活動でした。

ロシアでの私のミッション

「日本の演劇文化」の多様性と魅力をロシアの方達に紹介する、これが今回の私のミッションである。が、それにしても三八日間で一、二、一三か所でのレクチャーを行うというのはかなりの強行軍だった。

レクチャーは一回性の行為。いつてみれば、舞台と同じ。同じような内容を語るにせよ、その一回、一回に気を込めなければ、聴衆の反応はたちまち散漫なものとなってしまふ。つまりは、気が抜けないのである。おかげで体重が四キロも減ってしまった。が、嬉しいことに観客の反応はすこぶるよかった。

天候（サンクト・ペテルブルグでは雨にたたられた）



モスクワ芸術座附属演劇大学でのレクチャー

や会場によって観客数にでこぼこがあったものの、参加者はいずれも熱心に話を聴き、私の持参したビデオを食

い入るように見てくれたのである。おまけに、現地でレクチャーを聴いてくれた人からのリクエストで、回数も予定を上回る一七回に増えてしまった。これはロシアの人たちがいかに日本の演劇文化に興味をもっているかの現れでもあるが、講演直後にこうした申し入れを受けることほど嬉しいことはない。いや、嬉しいといえば、西シベリアのオムスク市を訪れたときにこんなことがあった。

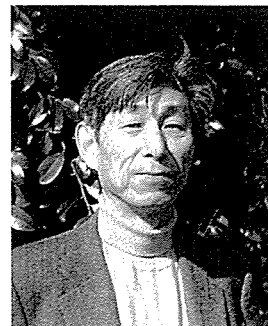
愛知万博からロシアへ帰国したばかりのラデュル・オムスク州文化長官との面談のおり、来期からオムスク大学とオムスク教育大学で「日本語教育」を行おうということになったのである。

実は、オムスク大学には二年前からセゾン文化財団の助成で「日本文化講座」が開設されているのだが、それを拡充したいとの文化長官の話に、私が「そのためにはまず語学教育が欠かせない」と指摘したことがきっかけとなったのだ。そして、その日本語教師の派遣を同じ西シベリアのノボシビルスクから招へいすることの橋渡しも私が行うことになった。

ノボシビルスクには北海道シベリア・センターがあり、八つの大学で日本語教育が行わ

演劇評論家

村井 健



プロフィール

【おもな活動】

1999年日露演劇交流推進会議（現・日露演劇会議）を設立し、事務局長に就任。

2002年全ロシア・プーシキン演劇祭で「日本におけるプーシキン」を講演。またロシアで「現代日本演劇のワークショップ」を企画・開催、ロシア語版『現代日本戯曲集』1、2巻を編集。

2004年ロシア国立オムスク大学に「日本文化講座」を開設。

【おもな著書】

『シチュアション』

れている。一方、オムスクは、ロシア有数の演劇都市。ロシアで先陣を切って『砂の女』『笑の大学』を上演したのもオムスクのドラマ劇場である。『砂の女』ではロシア最高の演劇賞「黄金のマスク賞」を受賞している。さらに、オムスク大学の出版会からは『現代日本戯曲集』も出版されている（来年三月には第二巻も出版される）。

つまりは、西シベリアの中心都市二つが、日本文化・日本語教育で結びつくことになったわけだ。これもまた、文化交流使ならではのミッションだろう。おかげで、責任がまた増えることとなった。

文化交流使の活動報告

タンゴのリズムと文化交流



5人での演奏

今回、私たちソレダッドは、七月二五日に愛知県立明和高等学校にて、文化庁文化交流使として活動を行いました。私たちのクィンテットは、ピアノ、ヴァイオリン、ベース、ギター、アコーディオンで構成されていますが、この組合せは大変珍しいものです。私たちはこの組合せならではの音色と、音楽の発するエネルギー、そして新しい音楽に挑戦しています。

今回、生徒たちとの文化交流の場を通じて、

たくさんの方のエネルギーをもらいました。私たちが演奏している最中の彼らの興味深げなまなざしが印象的でした。日本の音楽とは違う、タンゴ特有のリズ

ムを感じてくれたと思います。大きなコンサートホールでは、このように近い距離で観客と接することはないので、私たちが演奏をし、また、生徒たちが演奏を聴かせてくれ、言葉が通じなくても音楽でコミュニケーションが図れることを実感しました。

日本で演奏していて感じることは、日本の観客はいつでも一生懸命私たちの演奏に耳を傾けてくれます。静かに集中して聞いてくれるのが伝わってくるので、こちらもその気持ちに応えよう、いい演奏をしようという気になります。世界的に見ても日本のお客様は大変マナーがよく、また町の人々の生活ぶりや、ふと店に入ったときの対応などを見ても、いつも温かさを感じます。この温かさが、日本ならではのよさだと感じます。

私たちはいろいろな国で演奏活動を行っています。今回文化交流使として日本の生徒たちと過ごした時間は、日本文化に直接触れられる貴重な経験となりました。生徒たちが日本の歌を歌ってくれたのも大変興味深く聴かせていただきました。これからの活動の中で、異文化を理解するという意味で重要な経験になったと思います。

プロフィール

【メンバー】

マヌ・コンテ (アコーディオン)
バトリック・ドゥ・シュイテール (ギター)
ゲリー・カンビエ (ベース)
ジャン＝フレデリック・モラル (ヴァイオリン)
アレクサンダー・グルニグ (ピアノ)

【おもな活動】

1995年に結成。

1998年にブリュッセルの王立音楽院が主催するマチルド・オルレ・ダブサン室内楽コンクールで優勝、またローマの国際音楽トーナメントでも優勝。イタリア、フランス、ブルガリア、ドイツ、ルクセンブルグ、オーストリアなどの様々な音楽祭にも参加し、2001年4月の別府アルゲリッチ音楽祭でも演奏。1998年に1枚目のCD『ソレダッド・プレイズ・ピアソラ』、2001年に『ソレダッド』、2004年に『デル・ディアブロ』をリリース。

タンゴ・クィンテット

ソレダッド



©Jos L.Knaeper

文化交流使の活動報告

時空を超えた永遠のシネマ

ロサンゼルス夏の祭り二世ウィークは、パレード、盆踊り、茶道、華道、書道、盆栽、相撲、剣道、日本食と、日本文化なんでもありの大賑わいでした。

私は二〇年間ロサンゼルスで日本文化の紹介を務めてきましたが、今回私の出身である映画に絞った展示会を、お祭りの中心である日米文化会館で二週間あまり開催しました。お隣の日米劇場では、日米文化会館主宰の『平家物語』『切腹』が上映され、日本文化に興味がある方で大盛況でした。

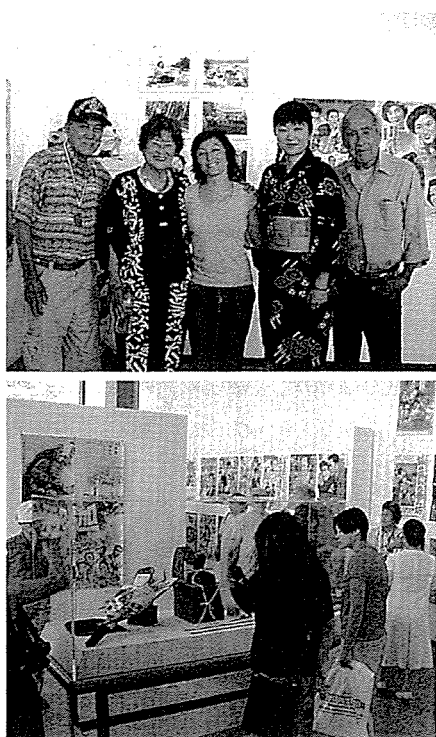
一九四〇、五〇、六〇年代は、日本映画の黄金時代で、私も当時七〇本もの映画に出演しましたが、黒澤、小津、成瀬、溝口、今井、小林、

木下、吉村監督ら巨匠が数々の傑作を世に送られました。これらの名画の懐かしいポスター、古い書き込みのある台本、ちらし、スチール、スナップ写真、ディレクター・チェアー、カチンコ、メガホンなど当時の思い出の品々が集められました。

会場では、各国の方とお話する機会がありました。その時代を惜しむご年配の方。台湾で戦後日本映画が上映され、お父様に連れられ当時少年だった台湾の方。アウシュビッツでお父様をなくされたジューイッシュユの青年。今のハリウッドは、ジューイッシュユでもついていると熱く説かれる映画人。撮影隊のグループ。ご両親がハリウッドでポスターを描いていて、

自分もポスターを描くというアメリカ青年。日本の血が四分の一入っている可愛い少女は、日本文化をもっと知りたい、日本語教えてと、その後、家までお電話くださる熱心さ。昔の活動家、映画人のご家族という方々、

さまざまなお出合いがありました。むろん、古い映画、サムライ映画、そして私の『青い山脈』を



「時空を超えた永遠のシネマ」展にて

女優

杉 葉子



プロフィール

【おもな活動】

1947年東宝に入社、1949年『青い山脈』（今井正監督、石坂洋次郎原作）で映画デビュー後、約70本の映画に出演。1977年アメリカに移住、1982年ホテル・ニューオータニ・ロサンゼルスに勤務。在職中に、LA東京会副会長、日本映画映像文化振興センター顧問、お手玉の会（本部・松山）顧問などを歴任。2003年ホテル・ニューオータニ・ロサンゼルスを引退。2004年日米文化会館主催の日本映画祭「活動写真」のプロモートや日米婦人会「ネイバーズ・クラブ」で日本文化の紹介を行うなど、各方面で講演会や文化活動を行う。

懐かしむ方々も多い中で、若者たちがアニメも含めて日本映画に関心があるとゆうのも心地強い限りでした。

映画の中には、前述の日本文化も時に含まれていますし、時を超え、遠い土地のことも自分がその中にいるよう、感じられます。人々の暮らし、たまたまい、ころが一番わかりやすく、深いところまで届くのは、映像の世界ならではだと思います。お互いの文化やころがわかりあう時こそ、世界に友だちの輪が広がり世界の平和の礎となると信じております。

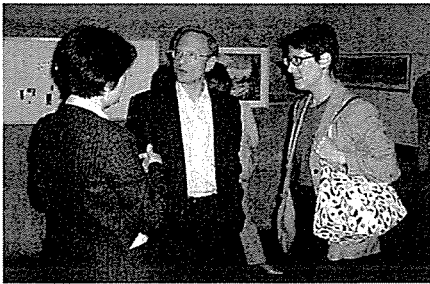
文化交流使の活動報告

映画『怪談』
名門バークレー校の劇場で

カリフォルニア州立大学で最初の大学であ

るU・Cバークレー校には美術館、博物館があり、『怪談』（一九六五年小林正樹監督）を上映することにいたしました。ヒッピーの発生の地でもあり、異文化にも知的な包容力のある、サンフランシスコ近郊のこの大学では、時々日本映画上映があり、日本文化への関心も少なくありません。たまたま同じ時期に「大正シーク」と銘打った大正時代の展覧会も行われており、日本文化に関心のある人々で賑わっていました。

六五年当時ドイツに住んでいた私は、『怪談』を見ようとローマへ飛びました。小泉八



日米協会のシグール夫妻も『怪談』に感銘



10年の知己のような親しさで「日本映画大好き」と言われる婦人

雲原作の四話のオムニバス長編映画に胸が熱くなりました。これはただのゴースト・ストーリーではなく、『黒髪』『雪女』『耳なし芳一』『茶碗の中』と国際的視野で幽玄の日本美を描いています。妖しくも美しい映像美、日本人の心の襞。ローマで世界の人に見てほしいと切望したのが、四〇年後の今、実現し感無量でした。

日米協会のシグール会長夫妻も「ラフカディオ・ハーン小泉八雲の描いたこの映画こそ、我々日米協会が意図している最も知的で文化的な合作の傑作である」とのお礼状をいただきました。

まず挨拶があり、映画上映にひきつづいて、交歓会が行われました。ご年配の婦人は「私は日本映画が大好きで、日本語を習っている」とか、若者は「マーシャル・アーツ武術を習っている」ので、今度はサムライものでね」とか。バークレー校の学位があるのに、いまだに当時のままヒッピーの成れの果てのような小父さんからの鋭い日本文化への質問にタジタジとなり、私自身が

女優

杉 葉子



プロフィール

1949年『青い山脈』で映画デビュー。1977年にアメリカに移住し、現在、日米文化会館主催の日本映画祭「活動写真」のプロモートや日米婦人会「ネイバース・クラブ」等で文化活動を行う。（詳細は本誌10月号25ページ）

もっと日本のことを知らなければと思いましたが、このほかにも参加者からそれぞれのご意見を聞かせていただき、また劇場側からは花束をいただき、楽しいひとときでした。

驚いたのは、私の昔の友人パトリシア・サモンに一〇年ぶりではったり逢ったことでした。ミス・テキサス、ファッションモデル、チャームスクールの先生などを経て、今や古美術商をしている彼女が、日本に住んでいたころに蒐集したコレクションも「大正シーク」に出品されているのでした。「ヨコが日本での私の出版を助けてくれた」などとおおげさに、劇場、博物館関係者に紹介してくれ、現地の文化人と私を力強い絆で結んでくれたのもこの会の成功につながったようです。

文化交流使の活動報告

触媒としての表現
写真を通じた文化交流

教会でのワークショップ

文化交流使としてドイツのベルリンに滞在を始めて約一年の歳月が過ぎようとしています。正直なところ前半というより、つい最近まで困難の日々が続いていったような気がします。

当初予定していた活動の一部が途中で中止となる局面に立たされてしまいました。当初はスチルムービーという、写真と朗読を合わせた試みを、ドイツ語圏、ならびにハンガリーで試みる予定でした。写真は日本のさまざまな場所のできる一七歳のポートレートで、朗読のテキストは写真を撮らせてもらった人たちの、モノローグで構成しており、ドイツ語に翻訳したものです。活動が中止となった理由はいろいろと考えられますが、写真と朗読を間に挟み、人と人のかかわり合いの中で生まれる何かを探し、お互いを理解しあうという試みだっただけに問題が起きやすいことも、理由の一つかもしれません。

ですが文化交流はそもそも摩擦が起きてあたりまえとはいえませんが、文化は生ものです。困難な局面に立たされたのは事実ですが、さまざまな分野の人の助けを借りながら日々、人との関係を築いてきました。

僕は写真家なので、まず若い写真家の作品を見るところから始め、そのつど自分の考えを述べてきました。そして七か月の間に一三人、一六〇作品と出会い、うち九八人の作品を一枚のDVDに収めることができました。うち三人の作家の作品は月刊誌『世界』のグラビアで新年号から三号続けて紹介します。DVD製作を思い立った理由は、できるだけ多くの人の価値観に出会いたかったこと以上に、意図してあげたかったからです。それに加えて、写真の今を知ること、ドイツの今の気分が理解できるのではとの思いからです。そして僕のレクチャーを受けた学生が学校に戻り、学校や教会に僕の存在が伝わり、学校全体でのレクチャーや教会でのスチルムービー、ワークショップの機会が少しずつ増え、ドイツで表現の勉強をしている日本人若手の作品を展示さ

写真家

橋口譲二



プロフィール

1981年に路上に集まる若者をとらえた『視線』でデビュー。1997年からスチルムービー*を創作。

【主な作品】

単行本『新・ベルリン物語 上・下』情報センター出版局、1993年。写真集『Berlin』ミトローバ、再版1997年。単行本『対話の教室』星野博美共著、平凡社、2002年

【主な受賞】

第18回太陽賞(1981年)、平成4年度日本写真協会賞年度賞、第8回東川賞国内作家賞(1992年)

*スライドと朗読、そして音楽を合わせた新しい表現の試み。

せてもらえるという幸運も舞い込んできました。今も旧東ドイツのグリマという街の教会と、河を挟んだ対岸のドーベンという村の貴族の館を使い、作品展を開いています。会期中に出品作家自身によるレクチャーも試みることになっています。

当初の予定とは大きくずれてしまいました。ワークショップに参加した青少年たちはもちろんのこと、さまざまなところで、さまざまな人たちの顔が見えはじめてきています。

音を楽しんだコンサート —10人のミラクルトランペッター—

私たちのアンサンブルは、我々のグループ名が表すとおり（英語名：TEN OF THE BEST）世界中から集めた10名のトランペッター・アンサンブルであり、技術面・エンターテインメント性の高いのが魅力です。通常トランペッターは音域が狭い楽器なのですが、普通のトランペッターだけではなく、音域の高いピッコロトランペッターや音域の低いコルネットなども活用



秋田県立勝平養護学校での活動

し、トランペッターの音域の狭さという弱点をカバーし、非常に音域の分厚い、重厚なアンサンブルを実現することが可能です。また、コントラバス・ピアノ・パーカッションを共演として取り入れることにより、オーケストラの曲も演奏できる、音楽の多様性を兼ね備えているのも魅力の一つです。

二月一日の秋田県立勝平養護学校での文化交流使の活動を通じて、養護学校の生徒たちの素直な反応に、私たちは音楽のすばらしさの原点を感じました。生徒たちが一生懸命生活している様子を見て、逆にこちらも勉強することが多かったです。今回受けた人間本来の純粋な「感動」を、今後の活動に活かしていきたいと思っています。

なかなか10名（共演者も含めると二三名）が一同に会す機会を作るのは難しいですが、日本に来日の際には、ぜひこういった訪問コンサートを積極的に取り入れていきたいと思っています。日本語でMusicは「音を楽しむ」という言葉で構成されているとのことですが、正にそれを体感できた、意義深いコンサートでした。

プロフィール

オッター・ザウターをリーダーに、トランペッター10人、コントラバス、ピアノ、パーカッション各1人の計13人で、バロック音楽からジャズにいたるすべてのジャンルを演奏するグループを結成。各メンバーの名人技だけでなく高度なアンサンブルの楽しさも聴かせてくれる。ユニークな編成のためのアレンジは、おもにメンバーのヴィズツティが担当している。1998年、2001年、2003年に続く4回目の来日。

10人のミラクル・トランペッター TEN OF THE BEST



コントラバス、ピアノ、パーカッションとともに13人が勢ぞろい

2005年メンバー

オッター・ザウター（ドイツ）
アレン・ヴィズツティ（アメリカ）
ラリー・エーラム（アメリカ）
ミロスラフ・ケイマル（チェコ）
田宮堅二（日本）
ヨアキム・ワンゲンダー（スウェーデン）
フランツ・ワグナーマイヤー（オーストリア）
ルドルフ・ケップ（ドイツ）
ベングト・ダニエルソン（イタリア）
ジェームス・トンプソン（アメリカ）

ローマ国立大学講談研究会

今の世にかなった講談を、若い学生と共に作る。念願だった『プロジェクトズイオーネ』がようやく動き出しました。

そのきっかけをつかんだのは、昨年一月のこと。ローマ国立大学東洋研究学部日本語日本文学科助教授、マティルデ・マストランジェロ先生の授業の中で、自作の講談を実演して思いがけぬ、大きな反響を受けたことでした。

「どうすれば講談師になれるのか」という質問に、師弟制度、前座修行なども説明した後「反骨精神と、まっとうな俠気きやうきさえあれば、だれでもなれる」と、答えました。……これは常日ごろ、自分に言い聞かせていることですが。



この日は6人が練習に参加



発表会直前。個人指導は次々に、1日なんと10時間

授業終了後、学生たちが「ワークショップがあるなら参加したい」と言ってくれました。彼らは単に、講談の《型》や《古典物語》の興味からではなく、私の現代的な《寓話的解釈》がおもしろい、といって、後日、自主的に集まってくれたのです。

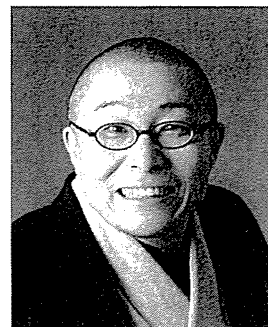
現在、最初に集まった三十数人の生徒のうち、一六人が、二か月後に控えた発表会に向けて、稽古に励んでいます。各人の《読み物》を決める際、まず《今のイタリア》《今の日本》ということを、一人ひとりとずいぶん話し合い、その問題意識から、《読み物》を探していく方法をとりました。このエチュードの中で「初め

て侍を身近に感じた」だとか、「人情の精神を理解した」「コミカルな場面は、中世のコメディ・デラールテに通じる」等、彼らの発見は、そのまま私の発見でもあります。

日本のどの大学にもない「講談研究会」がにわかにイタリアでできたことは、五月以降、集中的に企画している、人気の語り部ナラトリたちとの意見交換の際に大きな心の支えになりそうです。もちろん、帰

講談師

神田山陽



プロフィール

【おもな活動】

1990年2代目神田山陽に入門。
2002年真打昇進、3代目神田山陽襲名。
文化庁芸術祭新人賞受賞。
2003年彩の国落語大賞特別賞受賞。
イタリア文化会館主催『ピノッキオ』公演出演。
2005年愛・地球博開会式出演。
圧倒的なスピード感とその語り口で、自作のオリジナル新作と師匠(先代山陽)譲りの本格古典講談に挑む。演劇やオーケストラなどとのコラボレーションなど多ジャンルとの交流も積極的に、テレビ・ラジオなどの出演多数。

国後の創作活動にも重要な意味をもつことになってくれるでしょう。

入門したてのころから、こう考えておりました。「若者に魅力を感じてもらえなくては、講談師としての私の将来はない」「ただ、希少異質なものとしての天然記念物的古典芸能ではなく、大衆のものとして生き返る方法を模索すること」。

近年胸につかえていた悶々たる思いが、ここにきて晴れ渡る心持ちで、連日の稽古に汗しております。

文化交流使の活動報告

カリブ海文化と日本文化

紺碧の海と空のように二つの文化が融合できるのか

マイナス五度のパリから気温三〇度のカリブ海の島、グアドループ島（フランス領）へ着く。蒸し暑く日本の夏を思い出す。三〇年前に二回舞台公演で訪れている。

サン・タンヌの海岸にあるホテルのコテージに荷物を下ろして庭でのんびりビールを飲んでいる私の足元に、体長五〇cmもあるイグアナが近づいてきてこちらを見ている。いきなりの南国の出迎えにオロオロするばかり。

KA（ラム酒が入っていた空の樽に羊の皮を張った太鼓）の強烈なリズムでアンティール・ダンスのワークショップが始まった。参加者は三〇人ほど。生まれながらのリズム感と腰の動きがみごと。遠い昔、アフリカからこの



カリブ海グアドループ島にて



デモンストレーション後の質問を受ける

地に土着して混血を繰り返してきた彼ら独自のクレオール文化に肌で触れ、心の底からウキウキしてくる感情を抑えられない。

地元の友人のシャンタルさんの企画でダンス・ワークショップと私のデモンストレーションがセットになっている。汗をかいて、水を飲んで一息入れた若者たちが私の周りに集まってきて好奇の目で見ている。

まず私から皆さんへ質問する。日本という国を知っているか？ 日本という国を何によって知っているか？ などを尋ねる。彼らは日本にきたことはないものの、家電製品や歌舞伎、柔道や空手などのスポーツによって全員日本という国を知っているようだ。

このやり取りの中から、私は彼らの最も知っている柔道や空手、そして芸能の所作と型を演じ、カリブ・ダンスとの相違点は、重心を低く腰と腹からすべての動作が枝葉となつて発してゆくことだと説明しながら動いてみせる。

最後に、現代日本のテクノロジーの歴史は二〇〇年前の江戸時代のカラクリ人形に代表されるが、背景には徳川幕府が武器研究を禁

演出家

Ikuo 三橋



プロフィール

【おもな活動】

1976年パリ国立サーカス学校マイム科講師となる。国際コミックマイムフェスティバル（パリ）主催。日・仏・韓・伊8人のメンバーによる「MUGONGEKI」結成。

1998年『パリの道化師フランシスコ』フランスより招へい公演。厚生省（当時）中央児童福祉審議会平成10年度推薦文化財に選定される。

2002年『イメージCINEMA』演出。『パリの鳥人』横浜公演プロデュース。同年11月～03年2月まで文化庁在外研修員としてパリへ（80日間滞在）。2006年11月より文化交流使としてフランスに滞在。ベルギー、マダガスカル、モロッコなどでも活動している。

じ、代わりに庶民の娯楽を奨励したことがあると説明し、さらに、戦争は破壊であり、平和は創造であると強調した。

私の持参した最新型ロボットに、逆立ち、前後側転、歩行、おじぎ、ダンス等四〇種の動きをさせると質問攻めにあい……。

真つ赤な夕陽が私の背中からカリブの海に沈んでいった。こんな平和な日々が世界中に訪れることを祈るばかりだ。

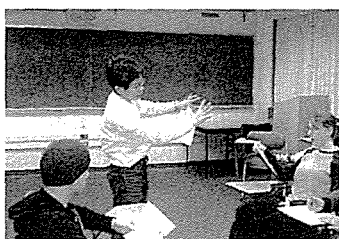
文化交流使の活動報告

日本語教育と演劇

二〇〇六年一月から三月にかけて、カナダ太平洋岸のビクトリアを拠点に、文化交流使としての活動を行った。

ビクトリアでは、ビクトリア大学に客員教授として赴任し、演劇と日本語のクラスを担当した。授業はいずれも月曜日と火曜日に集中させたので、残りの五日間をフルに利用して、文字どおり米加両国を駆けめぐり、合計八都市で、授業、ワークショップ、講演会などを行うことができた。

海外での演劇ワークショップは、既に一〇か国以上でやっているの、今回は特に、日本語教育と演劇というところに焦点を絞って、この報告を書きたいと思う。



ビクトリア大学での指導

今回の交流使の仕事が実現したのも、一つには、北米のいくつかの大学の日本語学科で私の芝居の台本が使われており、共同での教材開発や授業プログラム作りを求められていたという側面があった。

日本語教育の世界では、上級者ほど、

「教科書どおりに覚えると日本では通用しない」という冗句があるほどに、上級者の会話力を身に付けさせるプログラム作りに、多くの日本語教育関係者が苦慮している。

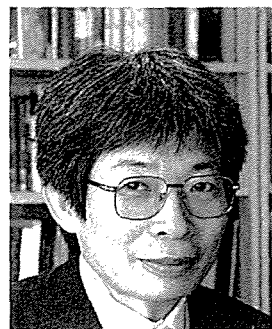
私の持論を簡単に書いておくと、日本語においては、他者とコミュニケーションをとろうとすると、冗長率（余計な表現）が高くなる。私たち日本人は、見ず知らずの人と会話を交わすのが苦手なところがあるので、当たり障りのない話題から入り、しかも遠回しに自分の意見をさりげなく伝えようとする。「えーと、それはどうですかね」「まあ、そういう面も、なきにしもあらずなのですが」「私としては、うーん、それは、難しいな、どうだろう?」といった持つて回った言い方が重宝される。

しかし、語学教育というものは、たいていの場合、無駄な言い回しを嫌い、簡潔で的確な表現を教えることを好む。教科書もそのようになっていく。だから、教科書だけを学んでいたのでは、実際の日本社会での対話に、なかなか、ついていくことができない。

また日本では、三人以上の会話（これを私は「居酒屋会話」と呼んでいるが）が多いのだが、会話のテキストは二人のものが多く、ま

劇作家・演出家

平田オリザ



プロフィール

昭和37年生まれ。大学在学中の昭和56年に劇団「青年団」を結成。

平成7年『東京ノート』で第39回岸田國士戯曲賞、平成10年松田正隆作『月の岬』演出で第5回読売演劇大賞最優秀作品賞・優秀演出家賞、平成15年日韓国民交流年記念事業『その河をこえて、五月』で第2回朝日舞台芸術賞グランプリ。

平成18年1月から3月まで文化庁文化交流使として、カナダ・米国で活動。演劇はもとより教育、言語、文芸などあらゆる分野で活躍。近年は、海外の演劇人との合同プロジェクトや、国内外で演劇ワークショップを行うなど、さまざまな面で注目を集めている。

た三人以上でも、西洋の会話と同様に、一人ひとりが意見をきちんと延べ合うスタイルのものが多く。通常の日本人の会話のように、多数の人間が集まって、なんとなく雰囲気を作り合意を形成していくというような会話が載った教科書は皆無である。

各地で行った日本語教育のモデル授業では、上級者を対象に、その点を留意して演劇的な授業を展開し、大きな成果を上げることができたと思っている。

文化交流使の活動報告

ベトナムという国



ハノイ日本人学校にて

ベトナムという国——日本を含め、恐らくほとんどの国々で、「ベトナム戦争」のイメージがまだ色濃く残っているだろう。パナソニック・ホーム・アプライアンス・ベトナム株式会社の岡田満社長はベトナムの人たちを「神に祝福された人々」、また、「日本人は過去の不幸な出来事を許して、忘れる」、そして「ベトナムはそれらを大きな心で許すけれど、決して忘れない」と言う。それは、時代の波に流されない頑固なまでの自信。そして違う考えをもった人々を深い心で受け入れる、という人間の本当に大切な心をごく自然に知っている人々に思えてならない。家族を第一に考える心、客人をもてなす心、など、そういう心をもった人々ということだ。そんなことを感じるまでに、ここに来

始めてから長くはかからなかった。

僕が初めてハノイに来たのは二〇〇〇年の秋。アジア八か国を名古屋フィルハーモニー交響楽

団と回っていたときだ。着いたとたん、街の明かりになんともノスタルジックな気持ちにさせられた。縁があつて、翌年の二月よりベトナム国立交響楽団とかかわりをもつようになった。最初は、欧州で生まれたオーケストラ文化のグレードアップに、日本人の僕が偉そうに指揮台に立つてもよいのかどうか不安だった。フランス文化を色濃く残しているベトナム・ハノイである。アメリカに勝った世界でたった一つの国、そして、日本とも不幸な歴史のあるベトナムである。最初に現・事務局長のンゴ・ホアン・クアン氏に聞いた。「どの国のオーケストラをお手本にしますか？ フランスですか？ ドイツですか？ ロシアですか？ それともアメリカですか？」。「Japan」と彼は即座に答えた。その日から僕はそれまで以上に自信をもって迷わず国立交響楽団とつきあうようになった。

文化交流使という役割は、「日本の文化を海外に紹介する」ということ。僕は、日本人が懐かしさを覚える音楽を出発点にし、それらをベトナムに紹介している。山田耕筰、岡野貞一、瀧廉太郎、伊福部昭、武満徹、芥川也寸志等のたくさんの日本人作曲家の作品をベ

指揮者

本名徹次



©小島竜生

プロフィール

昭和32年生まれ。平成4年ハンガリー・ブダペスト国際指揮者コンクールにて第1位並びにバルトーク賞を受賞。平成7～13年大阪シンフォニカー交響楽団常任指揮者。平成10～13年は名古屋フィルハーモニー交響楽団の客演常任指揮者も兼務し、12年のアジア・ツアーでは8か国で指揮し好評を博す。平成13年よりベトナム国立交響楽団のミュージックアドバイザー兼指揮者。平成15年オーケストラ・ニッポニカ音楽監督。平成17年11月よりベトナムにおいて文化交流使として活動。

トナムの人たちに紹介しているが、武満徹の『波の盆』などはみんなが口ずさむほど親しまれた。一方では、今年の初めにハノイ日本人学校の子どもたちに『赤とんぼ』『故郷』等の日本の唱歌を聴いてもらう機会を得た。これらの唱歌を知っていたのは一〇〇人のうち四人だけ。これには愕然とした。知っている日本の音楽といえば「ドラえもん」「ビートルズの日本語の歌詞がついているもの」等だった。あと二か月の交流使任期中にたくさんの方のことを考えなくてはならないようだ。

文化交流使の活動報告

アジアのコンテンツ支援の確立を

海外では、日本の文化というと、歌舞伎や能、華道などの伝統的文化が対象として捉えられている。しかし、今回メディア芸術やデジタルコンテンツが、我が国の誇るべき文化として認識され、当該分野で初めての文化交流使として活動できたことに感謝している。私は交流使の活動対象国として、いち早く国を挙げてコンテンツ振興に取り組んでいる韓国と最近の進展がめざましい中国を選択した。

韓国では韓国政府からコンテンツ振興の支援を受けた大学、中国では国策による代表的教育機関である北京電影学院や上海音楽学院と



スクリーンを用いて講演を行う

ともに今後劇的な進展の可能性のある大連・瀋陽地区の関連大学で活動を行った。活動内容は、日本政府のデジタルコンテンツの取組

について解説するとともに、文化庁が推進しているメディア芸術祭、学生CGやアジアデジタルアート大賞などの作品をとおして日本のメディア芸術やコンテンツの傾向について講演を行った。

交流使の活動をとおして感じたことは、日本のアニメーションや一部の映画については比較的よく知られ興味をもたれているが、その他のIT技術や論理的思考を背景としたメディアアートや表現技術についての取組はあまり紹介されていないこと、また、現在彼らのコンテンツ振興は欧米のスタイル、特にハリウッド流の人材育成になっていることである。

私の最も危惧している点は、中国や韓国のコンテンツ産業の発展が、アメリカの間接的な支配のもとに進展していく構造になっていることである。アジアには欧米とは異なった共通の歴史的文化的背景があり豊かなアジアの心情に育まれたさまざまなコンテンツが存在している。しかし近年のボーダレスなコンテンツ産業の浸透は、デリケートで基盤となる心の構造をゆがめてしまっており、アメリカのハードやソフトのうえに成り立つ教育や産業を中心に受け入れてしまっている。例えば、「わびさ

九州大学教授

源田悦夫



プロフィール

昭和25年東京生まれ。九州大学大学院芸術工学研究院視覚情報部門教授、同大学感性融合創造センター長。

メディア芸術表現、デジタル・コンテンツ・デザインに関する教育・研究の第一人者。現在科学技術振興調整費による新興分野人材養成として九州大学の先導的デジタルコンテンツ創成支援ユニットの代表を務めている。また、ソウルオリンピック公式ポスターや韓国大田での万博のCGを担当した業績もある。

び」を表現するのになぜアメリカのソフトのパレットを使うのか、精神的な動静の演劇世界の記録にアメリカ製のモーションキャプチャを使わなければならないのか、もっとアジアマインドをもったコンテンツ産業を中心としたIT産業との連携や教育方法論の確立が必要であると考えている。

今回の活動を通じて、今後、中国、韓国の関係者との人的なネットワークを個人レベルだけでなく、アジアの文化や産業育成のために積極的に役立てるためのネットワーク構築につなげていきたいと考えている。

ニューヨークの雅楽

雅楽は宮廷文化と結びつき、長い間「宮廷音楽」という脈絡を保ってきた。しかし、明治以降一般への解放が徐々に進み始め、特に一九七〇年代以降、「鑑賞のための芸術音楽」としての雅楽の普及が加速した。しかも、その範囲は日本国内だけでなく、海外にまで及んでいる。筆者は二〇〇六年九月に、アメリカ・ニューヨークのコーンビア大学で新たに始まった雅楽コースの立ち上げを手伝うこととなった。筆者がコーンビアで担当したのは、講義と実技の二クラスである。



学内演奏会で『越天楽』を合奏

雅楽の実技は、日本のように黙って師匠のやるとおりを忍耐強くまねする、という方法では学生がついてこない。まず、楽譜等をすべて英語あるいはチャートに翻訳し、配布し、わかりやすく説明する、などこちらの忍耐が問われる。最初は、混沌(?)としていたが、

練習を重ねるにしたがつて次第に合奏の体になすようになってきた。最終的には一二月の初め、学内演奏会で東海岸初の学生による雅楽演奏会が実現した。実は、その前、一月三〇日にも一部の学生が日本から来米された小野雅楽会の演奏会に飛び入り参加させていただいたが、この二つの「舞台」は学生にたいへんな刺激となり、合奏全体の質の向上に結びついた。

講義クラスでは、前半に雅楽の楽器、舞、レパートリーなど主として音楽に関する説明、後半では古代から現代にいたる歴史について概説した。授業の最後にアンケートをとったが、この結果が興味深い。「何がいちばん難しかったか」の問いに対して、「とにかく日本語の専門用語」という答えが返ってきた。当然である。説明は親切にしても決してしすぎることはない、ということを決して痛感した。逆に「何がおもしろかったか」の問いに対しては、「現代の雅楽」という答えが圧倒的だった。この「現代の雅楽」は国立劇場の「復元雅楽」、武満徹など現代作曲家による新作雅楽、最近流行している「ポップ・雅楽」を指している。しかし、一方で「伝統的レパートリー」は廃れ

神戸大学教授 寺内直子



プロフィール

1960年生まれ。東京藝術大学にて、雅楽の楽器を芝祐靖師に、小野雅楽会にて東儀信太郎師、上明彦師に舞を師事。長年にわたり、雅楽の歴史的研究に取り組む。現在神戸大学国際文化学部教授。地域文化論講座(学部)、総合人間科学研究科(大学院)において、日本の伝統音楽、世界の民族音楽に関する研究・教育に従事している。2006年8月から2007年3月までアメリカに滞在し、文化交流使として活動。

てもかまわないか」の問いに対しては、全員が今後も伝承していくべきだと答えた。

ふだん本務校の授業では、「伝統」とは固定した実態ではなく、それを伝承する人間が過去との関連の中で現在を位置づけるための概念であり、音楽の実態は常に変化し続けている、と強調している。コーンビアの学生が一〇〇年以上にわたって磨き上げられてきた古典雅楽の表現様式の魅力とさまざまな展開する現代雅楽の可能性の両方を感じてくれたとしたら、私のもくろみもようやくとまず成功したといえようか。

文化交流使の活動報告

ドリームズ・カム・トゥルー



シェルブル園芸高校で作品を前に

昨年九月～十二月、文化交流使としてスペイン、フランス、スウェーデン、イタリアで、日本の伝統「いけばな」を、デモンストレーション、ワークショップ、華展等とおして紹介してきました。

生活時間帯の違うスペインでは、華展は夜九時から夜中の三時までにもかかわらず、マドリッドでの華展には、六七〇〇名もの来場者があり、大成功を収め、後の三か国で大きな協力を得られる結果につながりました。マドリッドで津軽三味線奏者・吉田兄弟とコラボをしたり、バルセロナやサマランカでもいけばなのデモンストレーションを行い、多数の人に来ていただきました。また、新聞やTVのインタビューも

何度が受け、最初には緊張しましたが次第に慣れるようになりました。

次に、フランス、シェルブルへ。華展では、古典立花、現代立花など歴史が説明できる

ようにいけばなを展示し、四五〇名以上の来場者がありました。華展後にはいけばな入門者が四名とうれしい結果がみられました。園芸高校では、「いけばな」の言葉さえ知らない生徒たちを前に歴史を話しながら、デモンストレーションとワークショップを行いました。生徒たちは、とても真剣で、その後、学校から日本との交換留学の申し出がありました。

ヨーロッパでは花物の入手は簡単ですが、枝物が手に入りません。枝物は民家をお願いして切らせていただいたりしたのですが、シェルブルでは市所有の敷地で採取の許可を得ていただいております、たいへん助かりました。次国のストックホルムでは、雪の中、ホームレスのアジア系オバサンのように見える二名で傘をさし、鉢をもち、人目につかない所で、「文化交流使、枝盗人で……」という記事になったら大変……と話しながら枝物採取に歩き回りました。ストックホルムでは、北方民族博物館・国立大学等での活動を通じて、たくさんの方の経験をしてきました。

イタリアでは、中学・高校・大学でデモンストレーションとワークショップを行ったほ

華道家

川井春香



プロフィール

1947年生まれ。池坊中央研修学院特別科修了。現代立花研究室、古典立花研究室終了後、池坊最高職「副総華督」。ニューヨーク・メトロポリタン美術館等がいけばなデモンストレーション実施。(財)池坊華道会中央委員。華道家元池坊東京華道会支部常任幹事・考査員。2006年9～12月文化交流使としてスペイン、フランス、スウェーデン、イタリアで活動。

か、在伊日本大使公邸での秋の文化行事としてのデモンストレーションを行いました。金屏風の前に立ったとき、あと少しで終わると思ったのか、こんなにつばな所でさせていただけで、「なんと幸せ者！」と思ったのか、なんともいえない思いで涙が出そうでした。娘や亡き主人に見てもらいたいな……とこの三か月間で初めて思いました。人生の中でこんな素晴らしい時間をもたせていただいたことに、池坊、家族、そして生徒たちに感謝しています。私の大きなドリームズ・カム・トゥルーとなりました。これからも華道を楽しみながら続けていきたいと思っています。

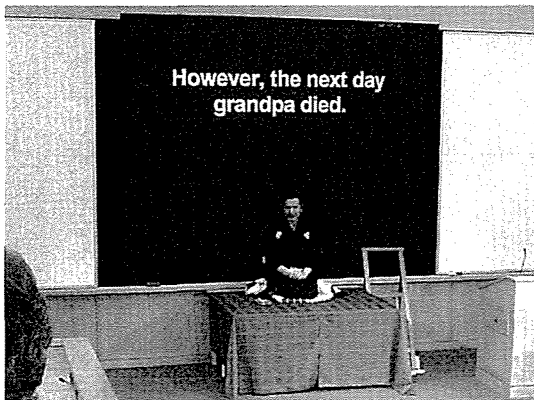
米国落語行脚

マンハッタンにアパートを借り、ここを拠点に一月、落語のデモンストレーションとレクチャーを行ってきた。ノートパソコンとビデオプロジェクタを携え、ハーバード大学・コロンビア大学・ワシントン大学など指折りの名門校で落語の歴史や、寄席、徒弟制度などの解説と落語の実演を、あらかじめ作っておいた字幕を使って行う。

どこの国に行ってもそうなのだが、まず落語という芸を知らない。海外ではコメディイイ例えばスタンダップで、漫談形式が主流。落語は座ったままで一人で何人も演じ分け、小道



コロンビア大学ドナルド・キーン日本文化センター（ニューヨーク）での落語のレクチャー



ハーバード大学ライシャワー日本研究所（ケンブリッジ）での字幕を使ったデモンストレーション

具も具体的な物はいっさい使わず、扇子と手拭いだけですべてを表現する世界に類のないコメディイのスタイル。彼らの周りには日本人は珍しくないが、冗談一つ言わないというのが日本人のイメージのようで、まず日本人とコメディイが結びつかない。おまけに古典となると歌舞伎や能のような独特の様式美をもったものという観念がある。「日本人でコメディイ？」「しかも古典？」。完全に想像できる範囲から出てしまっている。初めて落語を聞く人にわかるよう、本題に入る前の「マクラ」でいくつか小咄（こぼし）をやりこいう風（ふう）に人物を使い分けるのですよ、扇子や手拭いはこんな物に見立てて使うのですよと、ギャグを織り交ぜて解説していく、そして本題に入る。落語は「話芸」とよくいわれる。確かにそれは間違いではないが、正確にいうなら「イメージ芸」だ。学者や学生だけの閑（ひま）された講義として行う

のは嫌だったもので、どこも一般の人にも開放してもらった。現地に住む日本人も訪れ、アメリカ人も日本人も同じところで笑いが返ってくる。これは明らかにアメリカ人にも落語のイメージが頭に広がっている証拠だ。ただ単に日本独自のコメディイを紹介するだけではなく「日本人もこんなアホなこと言うんや」と、まじめ一方の日本人のイメージを変え、少しでも身近に感じてもらうことができたと思う。なにより同じ「落語」を観て、アメリカ人と日本人が笑っている姿は高座から見ても平和なものだった。

プロフィール

1958年生まれ。77年三代目桂春團治に入門。99年道頓堀中座にて三代目桂小春團治襲名。2000年英国の芸術祭エジンバラ・フェスティバルに落語家として初めて参加し、独自の字幕方式での海外公演を始める。以後ヨーロッパを中心に、延べ十数か国で公演。1982年ABC漫才落語新人コンクール新人賞受賞、97年文化庁芸術祭新人賞受賞。2007年2～3月文化交流使として、米国で活動。

落語家

三代目
桂小春團治



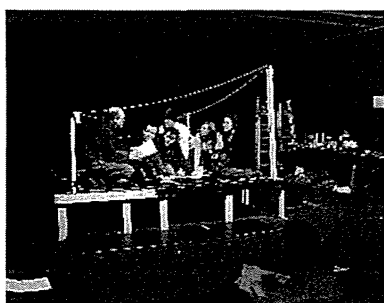
文化交流使の活動報告

日本式「小劇場」創作のノウハウ

二〇〇七年二月から四月半ばまで、ニューヨーク、ベルリン、パリで、文化交流使としての活動を行った。それぞれいくつかの大学や文化施設で、講演や授業・ゼミナールを実施し、演劇関係者とのミーティングを重ねた。

加えてニューヨークでは、私の戯曲『屋根裏』の英語版（『The Attic』）オフ・ブロードウェイ上演の現場にオブザーバー的にかかわることを活動の中心とした。

第一期「文化交流使」として派遣された小宮孝泰さんが、ロンドンで英語版落語の試演や一人芝居を行ったのと同様、実際の「上演」



熱気に満ちた稽古場

に結びついた活動である。「創作現場」に濃密にかかわる「交流」は、さまざまな条件がそろわないと実現しえないという意味でも、意義あ

るものだった。

『The Attic』上演は、すべてアメリカのスタッフ・キャストによるものであった。作者である私は、クローズドのオブザーバー活動と、広く日本の演劇文化の特性を伝えるという客観性の強い立場の、両輪で活動した。

多岐にわたるレクチャーは、日本演劇を紹介する際障害となるあらゆる疑問を解いていくことを可能としたばかりでなく、現場のスタッフ・キャストにとつて大きな刺激となった。システムに縛られ予定調和的にまとめていくのではなく、「その場にあるものをフルに生かす」という、日本の「小劇場」精神のメリットが伝わったはずだ。これは構造的には、日本の自動車会社の工場運営のノウハウが、アメリカに伝わっていったことに等しい。

「複式夢幻能」についての紹介は、今までになくわかりやすいものになったと思う。観客・マスコミ・学生・文化関係者にとつては、日本の伝統演劇と現代演劇の構造的関連について、具体的に理解できる機会であったはずだ。

劇作家・演出家
坂手洋二

プロフィール

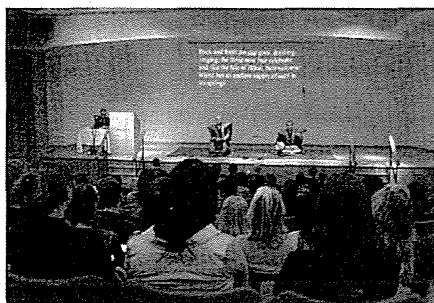
1962年生まれ。83年に劇団「燐光群」創設。一貫して作・演出を手掛ける。常に社会性を帯びたテーマを鋭い切り口で描き高い評価を得ている。近作『だるまさんがころんだ』では第12回読売演劇大賞・優秀演出家賞／選考委員特別賞、第8回鶴屋南北戯曲賞、第4回朝日舞台芸術賞受賞。日本劇作家協会会長、日本演出者協会理事、国際演劇協会日本センター理事。平成19年2月から4月まで文化交流使としてアメリカ、ドイツ、フランスで活動。

アメリカでは既にいくつもの場所でワークショップをもったことがあるが、実際の作品を題材に話ができるのも有効であった。リンカーンセンター・フォーダム大学の戯曲コースの学生たちは、自分たちでも『屋根裏』の設定をもとに短編を書いてみると約束した。

日本にも「現代演劇」が確固としたジャンルとして存在すること、「戯曲と演出を兼ねるリーダーが小さくとも独立した集団を作つて牽引してきた」という日本の「小劇場スタイル」の、創作力の優位性が確かめられ、具体的な例とともに伝わり始めたという気がする。

文化交流使の活動報告

スローフード・義太夫節を世界へ



ロンドン大学でのレクチャーコンサート

二月二十六日から一か月間、イギリス、ドイツ、スイス、イタリアの各地の大学や美術館等において、人形浄瑠璃の音楽である義太夫節についての講義や公演を行い、現地の芸術家、研究者、学生との交流を行った。人形浄瑠璃文楽は浄瑠璃・三味線・人形が一体となった日本の代表的な伝統芸能であり、世界遺産に登録されている。

国際的な公演は、人形を伴う人形浄瑠璃文楽として上演されることがほとんどであるが、今回は、日本の伝統的な声の音楽と三味線の表現力に焦点を当てて紹介することを目的に交流を行い、三月前半には竹本千歳大夫の協力を得て素浄瑠璃のかたちで公演を行った。

レクチャーコンサートは、①現地の教授たちによる解説、②私たちに、声の技巧や表現の特長、三味線

の楽器構造、駒について、また音色やリズムの変化で情景や心理の変化を描き出す実際にわたるの解説、③『平家女護島』より「鬼界ヶ島の段」の演奏、の三部で構成された。現地語に翻訳された浄瑠璃の詞章を演奏者の背景に字幕で表示したので、聴衆は同時進行で内容を理解することができた。

どの会場でも聴衆の反応はすばらしく、義太夫節の現代性と技巧を尽くした声や多様な三味線の音色に国際性と現代性を感じるという意見や、トロイの叙事詩の語りと義太夫の語りがよく似ているとの意見があり、多くの反響があった。チューリッヒの演奏会の翌日、演奏会に見えた老夫婦に偶然にお目にかかった。彼らは日本で文楽も観たことがあるという。片言の日本語で、「日本で文楽を観たときは人形を見てよく分からなかったが、昨晩は文章のすばらしさ、義太夫のすばらしさがとてもよく分かった。私たちは人形がない今回の素浄瑠璃のほうが好きです」と仰ってくださいました。この言葉を聴いた瞬間、交流使として演奏して本当によかったと実感した。

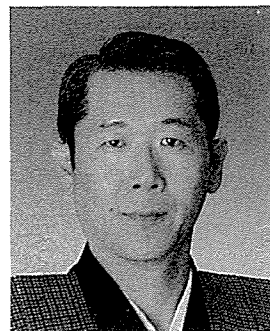
現代の日本は便利だが、その便利さが考え

プロフィール

1955年生まれ。71年に文楽協会三味線部研究生となり、二代野澤勝太郎に師事、野澤勝司と名のる。84年五代豊澤富助と改名。ハワイ、アメリカ、ヨーロッパ等で数多く素浄瑠璃公演を行っている。国立劇場奨励賞（77年、81年）、文楽協会賞（80年より5年連続）、国立劇場文楽賞文楽奨励賞（84年以後3回）、芸術選奨文部大臣新人賞（古典芸術部門）（89年）受賞。
2007年2月から3月まで文化交流使として、イギリス、ドイツ、スイス、イタリアで活動。

人形浄瑠璃文楽

豊澤富助



たり、想像したりする力をなくしてしまう場合もある。義太夫は、何度も演奏を聴き、時間をかけて味わう芸能であり、伝承する側も、時間をかけて一つずつ作り上げていくことを大事にする。いわば、義太夫はスローフードとしての価値をもつ。したがって、一九八〇年代以降のファストフード文化の流れは、素浄瑠璃の鑑賞や理解にとって好ましい環境ではない。芸術が若者の思考を深め育てることに果たす役割は大きく、国が異なっても解決すべき課題は共通であることを強く感じた一か月であった。

文化交流使の活動報告

文化交流使、中国をゆく

中国に一ヶ月から一年滞在し、大学生等に向かつて講演し、各地の作家たちとできるだけ交流してくる。それが文化交流使の理念なのだ。雲を掴むような話で、実際のところどうしたらよいかわからない。

連載やら何やらを抱えているので、中国から送稿できるとはいっても、一ヶ月の時間をつくるのが精一杯である。私は一ヶ月間中国



大連外国語学院での講義 (5月15日)

にいくことにしたのだが、この仕事がうまくいったのは長年の古い友人の陳喜儒さんのおかげである。陳さんには中国作家協会を三月いっばいで定年になり、私が中国にいくことにしたのは四月末である。

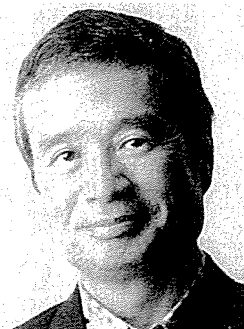
「中国にいる間は、自分が責任を持ちます。一ヶ月間、ずっとそばにいます」

陳さんはこういつてくれ、旅行の日程を立ててくれた。各地の大学で講演会の交渉をしてくれ、各地の作家協会に連絡して作家達との席をつくってくれ、新聞社にも連絡して取材をするようにしてくれた。そして、そのすべてに通訳をしてくれたのだ。陳さんがいなかったら、私は北京にいったとしても、ただいるだけで何もできなかったはずである。

陳さんは『立松和平文集』三巻を編集してくれた。私にとってはよき理解者である。中国の旅は、中国語ができればともかく、そうでなければ切符を買ったりホテルを予約したりが大変な苦勞となる。ヨーロッパあたりを旅行するのと同じように考えてはいけない。最初から全行程の予定をつくり旅行社に手配してもらうのが、最も手間はいらぬ。移動に苦勞していたのでは、何をやりについたのかわから

作家

立松和平



プロフィール

1947年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。在学中に『自転車』で早稲田文学新人賞。79年から文筆活動に専念する。80年『遠雷』で野間文芸新人賞、93年『卵洗い』で坪田譲治文学賞、97年『毒——風聞・田中正造』で毎日出版文化賞。国内外を問わず、各地を旺盛に旅する行動派で、近年は自然環境保護問題にも積極的に取り組む。2002年、歌舞伎座上演『道元の月』の台本を手がけ、第31回大谷竹次郎賞受賞。07年4月から1か月間、中国に滞在し文化交流使として活動。

なくなる。

「日本の作家がきてくれて、春風が吹いてきたように気持ちよく感じています」

吉林省のある作家の言葉である。彼らといろんな話をして、私も同様の感想を持った。人は笑顔とともに交流しなければならぬのだ。

いく先々私は大歓迎を受け、熱烈宴会でもてなされた。それが彼らの気持ちなのである。中国で飾らないコミュニケーションは、宴席で行われる。中国での文化交流使は、強い胃袋と腸が必要なのである。

文化交流使の活動報告

一つの伝統を理解してもらったため

三月五日より五月三〇日まで約三か月間、文化交流使としてオーストラリア・シドニーに行っていました。

文化交流使の使命として、日本の文化を外国でどのように広めればよいかと模索していましたが、シドニー大学が客員教授として受け入れてくださることになり、主にアジア課日本文化関係の各先生の授業時間をちょうだいして、日本の伝統芸能である「能楽」を「能の観方」というテーマで講義してきました。

また、実際の能の動きを体験するワークショップも二回ほど行い、基本の所作を指導してきました。講義・ワークショップとおして約五〇〇名のシドニー大学の学生と触れ合うことができました。

ほかにも国立演劇学校のNIDAでは、実



国立演劇学校NIDAの
2年生と一緒に



キャンベラ日本大使館にて
レクチャー

技指導を主にした授業を行いました。シドニー

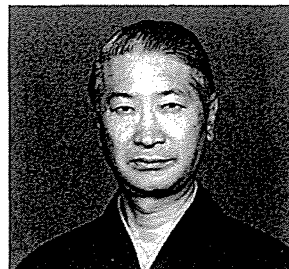
大学の講義と違い、実技の稽古は、一週間集中して指導することとなり、二・三年生の四八名を二時間余り指導しました。さすが演劇学校の生徒だけあって、能の型の取り方は日本人顔負けです。最後の授業では何事も経験と思い、学生に「面」を付けさせ舞わせました。授業を見学していたメロー校長も「面」を付け舞うというパフォーマンスで参加してくださり、思い出に残る授業となりました。

三か月間の滞在中は、日本人学校や大学・演劇学校等でもレクチャーを頼まれ、キャンベラの国立大学でも能を紹介することができました。広く知っていたくよい機会だと、日本全権大使・上田秀明大使、川田司シドニー総領事が、キャンベラ大使公邸において下院議長ご夫妻、外務省審議官のトーマス・マナ

ーご夫妻と在キャンベラ親日大使ご夫妻、数組に、日本文化の一端を紹介してください、レクチャーの機会もつくってくださいました。任期も残り一週間というときに、多くの学生や先生方の要望でできる限り能の本公演に近いデモンストレーションをすることができました。文化庁の後援で実現し、日本からも能

能楽師(能楽観
世流シテ方)

寺井 栄



プロフィール

1947年生まれ。53年観世流故25世宗家・観世左近入門。71年、戦没殉職船員追悼式(観音崎にて挙行)第1回より奉能に参加(当時の皇太子・皇太子妃両殿下臨席)。

86年より奉能責任者として『海霊』シテを勤める。91年重要無形文化財「能楽」総合認定。(社)観世会常務理事。

2007年3～5月文化交流使としてオーストラリアで活動。

楽師の方々にお手伝いに来ていただき成功することができました。

最後に学生の皆様、その他ご縁のあった方々が日本文化を素直に、また快く受け入れてくださったことには、人間として通じるものがあったからだと思います。

三か月間という短い時間ではありませんが、滞在していたからこそ少しずつですが活動の場所を大学だけではなく、各方面にも広がっていくことができたのだと思っております。それには、シドニー総領事館、日系マスコミの方々のご協力が多大であることを感じました。

日本舞踊の「根」はどこまでおりたか？

「自分の根を深く深く追求することによって、他と交わることを考えるべきであろう」「その根を深く深くおろしてゆくと地球の中心というところで、すべてが一点において交わることができる」——この文章に出会ったのは約一〇年前、くしくも河合隼雄元文化庁長官の著書『ここらの処方箋』（日本人としての自覚が国際性を高める）の項）においてであった。偶然といえばそれまでだが、この文章に導かれて日本舞踊の道に踏みとどまり文化交流使への標をいただいたと信じている。

在外研修生として学んだ英国は「異国」というより「第二の祖国」的思ひ入れがあったものの、実際に仕事となるとそうは甘くはなかった。英国社会の常識は研修生時代に大学内にこもっていた私の経験していない世界だった。「地



ロンドン大学のデビッド・ヒューズ博士と在英日本大使館主催世界遺産展オープニングに出演

下鉄がまともに運行することは幸運「大事な書類は郵便では怖いから直接持ってきてくれ」「銀行送金はミスが

多いから小切手で決済して」……こんなのは序の口でどぎもを抜かれるような話はキリがないけれど。

訪れた先々での英国人たちの熱い視線や反応、喜びようが、「英国生活の難点」のすべてを吹き飛ばしてくれた、というよりモチベーションをより高めてくれた。冒頭の河合元長官の言葉を借りれば「深くおろした根が、ある一点で交わった」という実感がそうさせてくれたのだと思う。この実感と喜びは文化交流使としての果報であり家宝である。

「日本舞踊のレクチャー&デモンストレーションを」という一見同じ要請ながら、先様によって微妙に求められているものは違う。その違いに柔軟に対応するには特に神経を使ったが、一方で「英国で求められている日本文化の紹介の仕方」をつぶさに学べたのも事実だ。集大成として行った一連の公演（「歌舞伎音楽、衣装の世界」等）はこの経験あつてこそ成功したと考える。

ビックリするような質問も枚挙にいとまなかった。「白塗り」の化粧を「ペンキ塗って肌は大丈夫？」と心配そうに聞かれたとき「ツラ

日本舞踊家 勝美巴湖



プロフィール

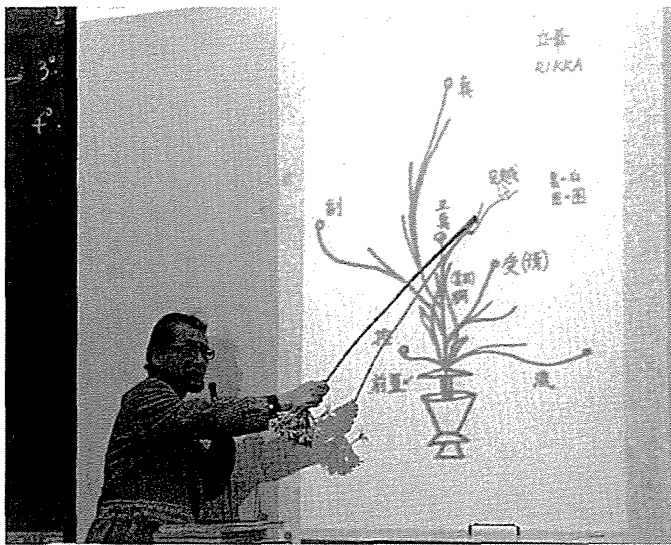
1965年勝美流家元・勝美伊三次の長女として東京に生まれる。90年より歌舞伎役者並びに坂東流家元である九世坂東三津五郎に師事。92・94年(社)日本舞踊協会新春舞踊大会賞、95年同会長賞受賞。97年文化庁芸術文化インターシップ制度奨学生に選出。2004年文化庁新進芸術家海外留学制度(在外研修)にてロンドン大学ゴールドスミスカレッジに留学。舞台芸術教育の修士号取得。06年12月～07年7月まで文化交流使として英国で活動。

の皮厚いからね」と言いそうになりながら、「化粧の原料はですね……」と真面目に解説した自分をたたえたいくらいだ。

「日本舞踊ではたくさんの演奏家や舞踊家が舞台にいるのに指揮者がいない。誰か隠れたところで指揮してるの?」「うーん、指揮されなくてもプロ同士だと相乗効果もあつて良い舞台が成り立つんだよね。言いたかったのは「深く根を下ろした本当の専門家同士は、自然に大事な一点で交わるのだ」ということ。さて、この意味は通じていたのかどうか……。考へ出すと眠れなくなる。

中国で聞く生け花に関する 素朴な疑問

私は、何度か中国に来ているうち、ほとんどの中国人が生け花を見たことがないということに気がつきました。これは日本人のほとんどが生け花を見てきたのとは大きな違いです。そこで、中国において生け花の良さを知ってもらうために、シヨールームを開設し、常時生け花を見せることがまず大切であると感じまし



北京大学のデモンストレーションで“立華”を説明

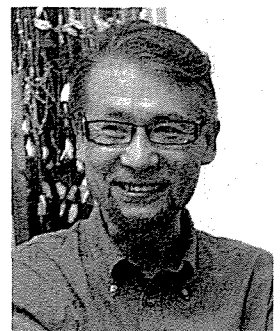
た。実演で生け花を見せるのはもちろん重要ですが、一瞬の花火のように終わってしまうでしょう。

私の住んでいる団地は北京郊外の中国人サラーマンの住む巨大団地です。そこに部屋の中が見えすぎる小さな部屋を発見し、生け花シヨールームを開設することにしました。さらに毎週日曜日に無料講習会を開きました。実際には日曜以外もやってほしいという要望で教えることもしばしばでした。ちょっと休みにくる常連までも増えてきました。特に夜は部屋の奥のほうまで生け花が飾られているこの一階の部屋は、団地の人たちの心を癒してくれているという感謝の言葉を何度ももらいました。ウインドウの中の作品に人だかりができて品評会になることもしばしばです。この一年でこの部屋を閉めることはまことに惜しいことです。

各地の講演会では実演ばかりでなくパソコンの画像を会場の大スクリーンに映して、古典と現代の生け花の基礎知識を与えたうえで実演を見せました。より一層実演の作品が印

華道家

大坪光泉



プロフィール

栃木県出身。1960年龍生派家元吉村華泉に師事。日本、海外での個展、講演多数。龍生派家元顧問として全体の指導に当たる。さまざまな企画展を流派を超えてプロデュースするなど、現代生け花界を牽引してきた。2005年10月から北京に在住。2006年9月～2007年9月、現地滞在型文化交流使として活動。

象に残ったという手応えがありました。また、前半の講義は生け花の精神的背景が解ったという感想をよく聞きました。

日本文化を専攻している北京大学学生への講演は白熱して充実したものになりました。どうして日本には二〇〇〇もの流派があるのかとか、流派の違い、その優劣に関する質問がなされ、さらにはなぜ免許状にそんなに高い料金を払う必要があるのかという日本の生け花の根本にかかわる問題にまで及びました。

このたびの文化交流使活動をとおして、日本の生け花師として今後どうあるべきか確かめながら仕事をしてきた一年でした。このような機会をいただき、心から感謝しております。

文化交流使の活動報告

世界の若者と日本マンガと碁

海外囲碁普及を始めたのが一九七四年。それから三〇年以上の歳月が過ぎた。その間に碁は世界に広まるだけではなく、プロレベルでも中国、韓国、台湾が実力をつけて日本だけの基からアジアの碁、世界の碁に成長。長年碁を通じて世界を回っているが、この数年の世界の若者たちの『マンガ』から始まった『クール・ジャパン』の流れはすごい。

日本でも子どもたちにとつとした社会現象を起こしたマンガ『ヒカルの碁』が仏語、英



テレジニシュ・アカデミイ学校囲碁部での指導

語、独語などに訳されたおかげで海外ではマンガイベントと碁は合体している。このマンガが出る前『碁』は欧米のインテリ層、または日本文化最前線の間で嗜まれていたが、今は世界のマンガファンの若者が主流になってきた。そのうえ、碁を始めて数年の青少年たちがもう何十年も碁を嗜んできたインテリ層を盤上で負かし始めている(負かされ始めた大人たちは、まだこの現実を認められないようだ)。こんな状況のもとで文化交流使の立場でウィーンを拠点に今年三月から欧州で囲碁指導をしている。

現在三つの学校に囲碁部を立ち上げ、週二回の講座、そして、欧州初の会員制囲碁サロンオープンのために準備をしている最中。週末には欧州のいろいろな国の大会にも足を伸ばすので、東京にいるとき以上の忙しさである。拠点をウィーンにした理由は、国連機関を有する国際都市であること、日本マンガブームがドイツ語圏内に広がってきていること、そして、歴史的に芸術、音楽を保護してきたウィーンで、日本文化の中で育まれた碁を若者たちに紹介するだけでなくじっくり教えてみたいと考えたことからだ。

一〇月から碁を教え始めたマリア・テレジ

囲碁棋士 小林千寿



プロフィール

1954年生まれ。4歳よりアマ五段の父から囲碁の手ほどきを受け、6歳で木谷実九段に入門。1972年(財)日本棋院に入段(初段)、1977年五段に昇段。女流本因坊3回・女流鶴聖3回・棋道賞受賞。ヨーロッパ各国、北米、アジア等、30か国以上において、海外囲碁普及に取り組んでいる。2007年3月～2008年3月(予定)まで、文化交流使として、ヨーロッパで活動。

アゆかりの私立中・高校の教育長は、新しい碁石を一つずつ拭いて碁^{ごけ}筒に入れる作業や、碁石や碁盤の材質が違ふと碁を打つときに響く音が違うことに興味をもっていた。日本が碁の勝負だけにこだわらず、道具にもこだわってきた文化を評価いただき、それが、由緒ある私立校の校風と合っていると判断されたようだ。マンガフェスティバルのテレビ取材で使われた言葉は『碁は平和的なゲーム』であった。若者たちの日本マンガへの情熱は、日本人から見ると過度とも見えるが、自分で縫った着物、衣装に身を包んだ若者たちの『日本ダイスキ!』の無邪気な笑顔に和まされる。

文化交流使の活動報告

中国江南の地での文化交流

八、九月の猛暑の二か月、無事大任を果たすことができ、安堵と満足感に浸っています。

このたびの文化交流使としての活動は、第一に、在上海日本国総領事館の全面的なご支援と、第二に、上海の有志が結成したキヤラバン隊の力強い協力を得て、初めて為し遂げられたことで深く感謝しています。特にキヤラバン隊は、毎週金曜日の晩から、月曜日早朝までのボランティア活動をしてくれました。それはバン車に花器、花材を満載し、深夜目的地に運搬、翌日のデモンストレーションに合わせるかと一転して講習会の終了を待つ荷造りを、そして上海に持ち帰るといった活動でした。この献身的な働きにより、望外の交流が実現できたのです。さらに、上海総領事のお計らいで、文部科学省副大臣、文化庁長官から直接激励のお言葉をいただき、私とキヤラバン隊にとって、大きな励みとなりました。

この間、上海、蘇州、南京、杭州、上海松江區、北京、西安で展開した事業は、実演一回、講習会一五日、花展二回、講演二回、表敬訪問二〇機関以上、記者会見一回、記者取材一回。ほとんど休む間もなく活動できました。



南京でのワークショップ

実物の「日本いけばな」を見る機会のなかった中国各地の人々に、大きな感動で受け入れられ、引き続き講習会等による指導を要請されました。彼らは東洋的いけばなに大きな空間（余白の美しさの空間）をもつ「日本いけばな」に大きな魅力を感じているのです。古くは中国に存在していた「中国插花」のかおりを感じているようでした。

一方私にとって、日本の伝統文化の源流の一つと考えられる江南の地での文化交流の活動は、その流れを実感できるよい機会でした。とりわけ浙江工商大学日本文化研究所で開催した学術講演は貴重な経験で「南宋、明代の插花と日本いけばな」という明確なライフワークが見いだせて幸せでした。

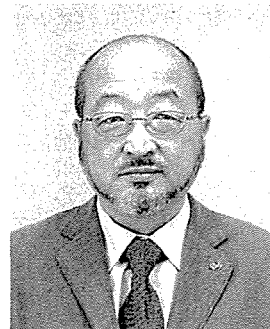
このたびの文化交流使活動の目的は、中国各地に「日本のいけばな」の種を確実に蒔くことでした。任務は達成できたと思います。今後、大樹に成長するのを見守ると同時に、幅広い人々のお力添えをいただきながら着実に、その輪を広げたいと考えています。

プロフィール

華道家

三浦友馨

1948年生まれ。71年いけばな教授者となり現在に至る。87年より国内はもとより北米、アジア等で、数多くのいけばな講習会やデモンストレーションを実施し、いけばなの普及に取り組んでいる。2005年、池坊中央研修学院教授および財団法人池坊華道会派遣教授に任命。2007年8月から9月まで文化交流使として中国で活動。



文化交流使の活動報告

盆栽は世界をつなぐ

二〇〇七年九月から一〇月にかけてオタワ、モントリオール、トロントの三都市で、日本大使館、総領事館、植物園などで講演、デモンストレーション（実演）、ワークショップを行いました。

カナダの盆栽の歴史は四〇年ほどですが、一八年前にモントリオールを訪れたときより愛好家も増え、盆栽の質も格段に向上したように思います。BONSAIという言葉も浸透し、滞在中は新聞等の取材を何回か受けました。

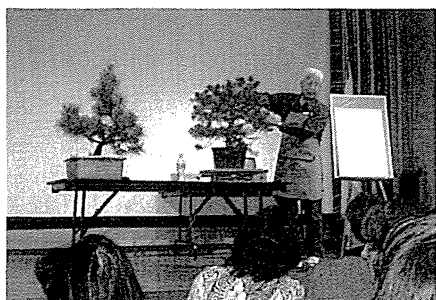
オタワでは、オタワ盆栽会の第二〇回展があり、日本大使館でデモンストレーションを行い「私の盆栽哲学と目指すもの」という資料を配布しました。これは好評だったのでその後のデモンストレーションでいつも配布しました。

トロントでは、愛好家の作品も見ましたが、樹種も多く質も高く、よく培養している一方で、基礎知識の不足も痛感し、まず基礎知識をあらためてレクチャーする意義を感じました。トロント植物園では、盆栽の講評を行いました。まずその盆栽の長所と欠点を話し、正確さと魅力的な将来像を重視して改善策を図

示しました。トロント市庁舎の訪問時には、開会中の市議会でも市長ほか全議員に日本政府派遣の文化交流使として公式に紹介され、起立礼を受けました。

モントリオール植物園には、一八年前にできた日本庭園と日本館があり、常に日本文化紹介の企画が開催され、社団法人日本盆栽協会から寄贈された盆栽が常設展示されており、多くの参観者が絶えず出入りしています。カナダの盆栽の水準が進歩を見せているのはこの影響が大きいと感じました。

今回は、ワークショップの機会も多くありました。デモンストレーションは一方通行での知識と技術の伝



カナダ日本大使館でデモンストレーション

達ですが、ワークショップは対話によって個人の知識や技術を知り、その人に合った技術の向上をさせることができます。各イベントでは、

盆栽作家 中村 享



プロフィール

なかむら・すすむ 1932年生まれ。64年(株)湘南ガーデンセンター設立。69年パリ国際園芸博に盆栽53点を出品。世界中で盆栽に関するレクチャー、デモンストレーションを行っている。日本盆栽協会理事。新聞・雑誌・単行本等多数執筆。主宰する湘南盆栽教室では国外からの研修生も受け入れる。2007年文化交流使としてカナダで活動。

盆栽の基礎知識を五要素にまとめ、平易な言葉で説明し、ユーモアを交えて会場に明るい雰囲気を作るように努めたためか、終わると多くの人から握手を求められ「次回はいつ来てくれますか?」と聞かれました。参加者のアンケートの反応を見ると好評でした。

「文化交流使」の派遣は日本文化のPR活動として効果的であり、費用対効果と目に見える結果を勘案しても大いに力を入れていただきたいです。一か月間、休日が取れないほど多くの需要があつたということは、私の張り合いでもありました。関係者の方々に深く感謝する次第であります。

文化交流使の活動報告

自覚を新たに

私はこのたび、韓国のソウル並びに済州島、それからフランスのパリ、そしてスペインはマドリードで、それぞれ展示会と公開制作を行ってきました。

日本の木版画は浮世絵に代表されるように、今や世界的に知られるものではありませんが、私の場合の手彩色の木版画は、それほど認知されているようには思えません。それだけに、技法も含め興味をもたれましたが、何よりも各国の皆様が驚いていたのは、制作の速度のようでした。乱暴といえそうですが、下絵もなく、失敗もない。その場での気分をそのまま彫るのです。と説明すると、制作の全工程を見ただけに、共感をもって迎えて

くれました。もちろん浮世絵との比較の中からの質問も、矢継ぎ早にありましたが、木版画の幅を伝えることはできたと思います。

色彩の鮮やかさについての興味も大きかったようで、そのことで、沖縄の特異性を説明できるのと同時に、日本文化の多様性、三〇〇kmに及ぶ列島の文化的奥深さにも、言及する機会がもてました。

韓国の済州島では、風土的な相似性に驚き、フランスにおいては、大聖堂の荘厳さに圧倒されて、スペインの地では、芸術に対する関心



マドリードでのライブ制作

文化庁文化交流使活動報告会

文化交流使として海外で活動いただいた方々による報告会（公開フォーラム）を下記のとおり開催いたします。（入場無料）

お誘い合わせのうえ、ぜひご来場ください。

〔日時〕 3月13日(木) 14:30～18:30

〔場所〕 東京藝術大学・奏楽堂

〔出演者（予定）〕

勝美巴湖(日本舞踊)、桂小春團治(落語)、立松和平(作家)、寺井栄(能楽)、寺内直子(雅楽)、豊澤富助(文楽)、名嘉睦稔(画家)、中村享(盆栽)、三浦友馨(華道)ほか
〈50音順、敬称略〉

〔プログラム（予定）〕

開会挨拶（青木保文化庁長官）／
デモンストレーションおよび活動報告／パネルディスカッション

*文化庁HP (<http://www.bunka.go.jp/>) から観覧申込みができます。

*当日受付の場合、満席のときはご遠慮いただく場合もございます。

お問合せ：文化交流使公開フォーラム事務局（TEL：03-3263-8695）

画家

名嘉睦稔



プロフィール

1953年沖縄県生まれ。裏手彩色と呼ばれる技法を用いた木版画作品を数多く発表。97年地球温暖化防止京都会議の郵便記念切手とポスター、2000年九州・沖縄サミット広報用絵葉書の原画を制作。07年9～11月文化交流使として活動。国際サンゴ礁年2008のポスターに作品採用される。

の深さを人々の反応の内に確認し、深く感じ入りました。

見聞きし学ぶことが多く、日本文化を伝えるという大役が、私に果たせたかどうかは判然とはいたしません。しかしながら、現地における外務省関係者をはじめ、協力を惜しまない彼の処の友人たちの努力を思うと、私も微力は果たせたと、考えなければなりません。

ともあれ、画家としては、その成果である絵を観覧していただくことが一義ではあります。文化交流使の指名の榮譽を思うと、積極性をもって外国における展覧会を、これからは行わなければならないと、自覚を新たにいたしました。